

三月興行
文樂座人形淨瑠璃



鳥居清經画



文樂座

四つぼし



大



一部 金十五錢

花はくれなひ、柳はみどりの春三月が訪れました。その和やかに増してみなさまの御健康の愈々お熾んなことは欣ばしき極みで御座ぬます。茲に花に華ます絢爛華麗の粋を竭した彌生興行を迎へ得られましたことは偏にみなさまの厚き御支持と絶大の御後援に依るころあつく御禮申上ます。

花の春をかざるみなさまの郷土藝術の王座文樂座人形淨瑠璃は爰に名だたる傑作を揃へて一座總出演の豪華でみなさまの御期待に應へんさいたすもので御座ぬます。春三月の御興樂はまづ郷土の華咲盛る文樂座へま御はこびの程お希申上ます。

昭和六年三月

四ッ橋

文樂座

昭和六年三月一日初日

初日 午後二時開幕
二日目より 午後三時開幕

二日目よりの

御觀覽料

- 一等椅子席 御一名 金三圓
- 二等席 御一名 金一圓五十錢
- 三等席 御一名 金八十錢
- 一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
專用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へツカへ廣告掲載望む向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪西區土佐堀通一丁目

長三〇八番
四九四番
四九四番 } (44) 土佐堀



● 人形上りのがく屋



二日目の豫定時間表

伊賀越道中双六

唐木政右衛門邸の段 (午後三時開幕)

御休憩時間 十分間

大廣間の段 (四時三十分開幕)

御休憩時間 十分間

口上の段 (五時十分より廿分迄)

御食事時間 廿分間

義士銘々傳

彌作鎌腹の段 (五時四十分開幕)

御食事時間 廿分間

義經千本櫻

道行初音の旅路の段 (七時十分開幕)

御休憩時間 十分間

川連法眼館の段 (七時五十五分開幕)

御休憩時間 十五分間

明烏六花曙

山名屋の段 (九時四十分開幕)

(午後十時三十五分終演の豫定)

舞臺裝置 松田種次



人形芝居について

- ◇ 人形芝居の種類のこと
- ◇ 文楽座なり立のこと
- ◇ 人形頭説明のこと

今から見ては簡単なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたさ御座います。其當時に、四三云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしう御座います。淨土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものでらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形さ此三者が綜合される事に成りました

たのむ、慶長年中、即ち徳川の始
頃ですが、忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町、さか葺屋
町さか、櫓も立つて此人形芝居が繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのです。然し舞臺などは固よ
り無く其人形さて首があるばかり、
遣ひ手の手も人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛騨掾が始めて其手足の工夫も
したものです。由來此掾號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形が出来たり、野呂松のの

るま人形が出来たり、次郎三郎が
おやま人形を使つたり、殊には彼
の元祿時代になるまで大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をなはじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸し、しかも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛さ云ふ名人が出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたさ云ふのが、始めは此人形を
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之が見好くないから黒幕の蔭に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が袴を着け手摺を離れ無

量の手裏を遣ふに其全身少しも亂る
事がないといふ評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西さ東さ同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した
のですから、従つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美々しく立派やかな盡
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ぬきにするやら、
太夫も出語りをするやら、例へば人
形にしてからが先づ眼が動き、指先
が動き、享保の末には竹本座『大内
鑑』の與勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になるまで豊竹座『武烈天皇

織」の佐手彦の眉を動かさしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手も輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の暗業を示して以來さいふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『夏祭』の人形に始めて帷子衣裳を着せる所か、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黒繩子の前帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で真似てる所事實此時代さいふものは操盛人を極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立

して其最負は凄まじい有様であつた云ひます。江戸にて矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞し此の人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てから云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があつたのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になるに漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたを見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れり云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大坂高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが、大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四ッ橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます。次第で御座あります。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々々を定まつて居ります。例へばげん

の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので、其後、廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南水漫遊などを見るに別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があること云ひます。兎もあれ昔相巫や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた『日本振

袖始』から出た人形だと申します。それから若男さいふのは源太さも呼んでゐるさか聞きます。持役としては『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其肩を引きつめるさ『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをなさるさ云ひます。又所謂おやまの中にはおむすさ云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染、『壺坂』のお里、『妹背山』のお三輪などを勤めるものもあります。南水漫遊に傾城さあるのも多分之と同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



前
伊賀越道中双六

政右衛門屋敷の段
大廣間の段

政右衛門屋敷の段

豊竹綾太夫
鶴澤友若
野澤吉左
竹本浪花太夫
鶴澤寛市
鶴澤清二郎
次
竹本相生太夫
鶴澤芳之助
鶴澤友造
切
竹本大隅太夫
鶴澤道八

この淨瑠璃は近松半二近松加作の合作『乗掛合羽』の改作にて十冊よりなり、この度の語り場は五冊目でありませす。政右衛門屋敷の段は『饅頭娘』と謂はれてゐる場面であります郡山の唐木政右衛門は義弟のために舅の仇を討つ助太刀をすべく決心し女房お谷を離別しいたいけな七歳のお後を後連に迎へるさいつた反間苦肉の術策まで催し、藩公審田大内記へ暇を取るべく、暗れの試合までわざと負けを取つて暇の出るやうに念じたが却てその腕前、膽力に藩公の

重用を促し、眞鍮白刃の寸前に殿へ眞影の極意を傳授し、殿の允許を得て目出度仇討助太刀に立出するさいふ伊賀上野の大仇討に絡るものむたりです。

(床本) 政右衛門屋敷の段(中)

昔は山の後なれや今も名のみは郡山家中屋敷もつくるはず直な唐木の正目ある家の柱は退去りに奥様役の留守預り石留武助は忠義者、常の奉公裏表、内證賄ひいそがしき臺所より腰元共ばらなくさ立出、コレ武助殿今夜は内方へ嫁御様が見へるげなお目出度い祝言振舞わたしらもあやかる様にお手傳ひに参りました。イヤ御苦勞く小身の旦那政右衛門様仲間一人下女一人若黨の此武助の料理

人形

石留 武助 吉田 玉七

妻 お 谷 吉田 文五 郎

唐木 政右衛門 吉田 榮 三

宇佐美 五右衛門 桐 竹 門 造

娘 おのち 桐 竹 紋 司

乳母 お倉 桐 竹 紋 太 郎

母 柴 垣 吉田 小 兵 吉

人やら家老やら人手がなさに御家中の女中方を御無心、待女郎にも酌人にも各様頼みますイエ〜同じお給仕でも祝言を聞けば気がしよぎ〜

したが合點の行ぬ事はお谷様さいふ奥様お里歸りなされてから聞けば去られなさつたげな、おまだぬくもりもさめぬ中新らしい女房を入るこはモ餘りな手廻しサイノ今度の奥様はどこからお出なさるのじやえい、ヤ

家元もうつつ存ぜぬ何だか知らぬが旦那が一人呑込で今夜嫁を呼程に祝言の拵へせいと言付て出られたから何が俄に料理拵へ少斗り聞はつた海老の舟盛、置鯉、置鳥などいふしちむつかしい事は取置鮎の吸物腹

合せは新枕の心じやげな、お肝心の鳴臺を忘れて正月のお古を組かへ聞

に合せたがいかれいものは鏡子かへの折形御存じなら折て戻いていハテ何の其様に儀式せいでも大事な仲人さへない嫁入今迄ごぞにこつそ

りさ圍て有つた女中で有るホンニあの政右衛門様もお顔に似合ぬ色事仕先の奥様はお腹お立ふチ、それ〜馴染の女房隨取らして後へ来る嫁づらはどんなお頬じや、見てやりたいささかない女子の口々にうたて

浮名の高話、うき事の思ひの種を身に持て我内ながら心置く夫の留主を窺ひ足腰元目早く、奥様よふおいなされましたと言ふに武助も押下

り幸ひ只今旦那のおるすお歸りならばお知せ申さうまづおゆるりさあ

(床本) 政右衛門屋敷の段(次)

しらふ程いさゞ重なるうさつらさ諸
 白髪迄と言ひかはした人の心も替は
 ばかばる我内へよふ来たさいはれる
 ようになつたわいの身に覺へはなけ
 れ共親分の五右衛門様どのよふなあ
 やまりしたぞ、いさまの印の此一腰
 わけが立たれば受取らぬさお屋敷に
 も置れば立よる方もない身の上、
 見ればいかふ賑やかなお振舞でも
 有のかさ問はれてそれさ言ひかぬ
 の後先見づの下女はした。今夜はお
 屋敷へ嫁御がお入りなされます。ヤ
 ア嫁さば誰か嫁、コレ武助もやそ
 ふではあるまいと思へど、もし旦那
 殿に女房が来るのじやないかやイヤ
 其義はエ、武助殿、かくしてもごふ
 で知れる事、政右衛門様のお内儀様
 で御座ります。下地からわけのある

事かして、今夜俄の御祝言、私等も
 隣り屋敷からお給仕に雇はれました
 お前様は先の奥様、てつきりさお妾
 に見かへられなされたに違ひはない
 ぐつさおりんきなされませと、身に
 もかいらぬ下々の法界格氣に焚付け
 られいさゞ重なる口惜さ包かぬれば
 見て取武助エ、コレ女中方役に立た
 ぬ事言はずさお臺所に人がない、爐
 の炭もついでもらふアイ、合點じ
 やテア皆お出で旦那のお歸り待ち女
 郎こちらも嫁御の相伴でよい夢見よ
 ふぞ打つて立て行く間を待兼て、
 かつばさ伏して泣居たるチ、お道理
 ぢやくしたか申し奥様必ず格氣な
 されませなへアノいやる事はいの格
 氣さば一通りの事、非業の死をなさ
 れたさ、様、弟、志津馬が敵討の力

と頼むはたつた一人其夫政右衛門殿
 縁切れたれば誰を頼みに大敵の股五
 郎いつ本望が遂げられふ、力も綱も
 切はてしと思へば胸が張り裂るさな
 げ、ば供に泣じやくりお氣づかいな
 さるゝな、たさへ旦那がごぶおつし
 やつても拙者めが命にかへても此御
 縁は切らしませぬ格氣なされなさは
 その事お前様のおなかにば政右衛
 門様の御世繼がござりますぞへ、去
 り狀取ふが後づればは入らふが其お
 子さへ御平産なされたれば切ても切
 れぬ血筋の縁政右衛門様の奥様さ言
 ふばおなかか證據のお谷様、敵討の
 助太刀も頼みの種の人参子サ産み月
 に氣を揉であやまち有ればごふなさ
 るゝ追付旦那お歸り有らば格氣がま
 しい御顔なされずさかく此内を動か

ぬよふになされませ御合點が参りま
したかア、こは言へ義理の有る女房
去て嫁入の祝言のこは旦那ぼどふし
たお心じや拙者もいつさい合點が行
かぬ、ほんに此蝶花形、私は折様存
ぜぬお前様お頼み申ますと言はれて
手には取りながらみすく夫を寝取
らるゝ、あた憎らしい蝶花形、犬骨
折つて早ぶさの鷹の餌になる春の雉
子、そこに夫の聲聞こへあれ旦那の
お歸りしげらく忍んで御座りませこ
家來が情けを力草逢たい夫にかくる
ゝも疵持つ心唐紙を押開け

(床本) 政右衛門邸の段 (切)

心かけ有る侍は地を這ふ虫も氣を赦
さぬ唐木政右衛門伊達を好まぬ刀の
柄前、人に勝れし袴の幅、上屋敷よ

り歸り足、武助手を突きヤ申し御且
那殊のほかお障入り御用の品はいか
体の儀でござりましたなサレバ、
此間から辭退する彼林左衛門と武藝
の試み明朝正六時御前において立
合せ押付て御家老の言渡しエ、今晚
妻を迎へます婚禮の中一兩日お延
し下されさ願ふてもいかな聞入す
女房呼ば私事明日は延ばされぬさ
モさりさば心ない家老殿此方は内へ
氣がせくも尻に成に漸う只今エ
祝言の拵へ用意は出來たかアイヤ
レ、知行取にも飽果た嫁の來るま
で禊脱で休憩せむ枕おこせ女子共
アイも返事もさし足に角を隠せし塗
枕そつと傍へに奥様を腰元がはりの
見へ隠れ袴は解ご胸さけぬ尖ひ常の
侍肩衣折てたくんで取直す詫の種

こは見付た夫ヤイ武助アノ女は何者
じややい。エ、イ、イヤあれは彼
今日お目見へに参つた新參の女中で
ムサナ、ハイ旦那様お目かけられて
下さりませ、フウ奉公人じやな。見
かけから愚鈍そふなふつゝかな女な
れどマ、遣ふて見てくれふ。コリヤ
ヤイ今夜は身共が女房を呼むかへる
祝言の給仕申付るぞエ、アノ嫁御さ
お盃の其給仕をせいさばエ、そり
や餘りイエサア、餘り急な御祝言不
調法な私が給仕得せずは奉公叶はぬ
立て歸れア、イヤ申何でも御意は背
きませぬさ下女に成ても夫の内放れ
兼たる心根を察して武助が呑込涙、
チ、そふだ、奉公は辛棒が大事何
おつしやらふさナイ、こそこら
を程よふ搦梅加減ヤドレお盃の用

意せむと料理をしほに立て行折から
 宇佐美五右衛門様御出さ案内すハア
 又堅ごふむわせられた誰ぞ羽織持こ
 いと言はぬ先から心得て勝手覺はし
 女房の徳、氣轉きかして後から着せ
 る羽織をひつしよなくエ、子供では
 ないはい差出女めあつちへ行さ、れ
 め付られて是非なくも立間せはしく
 入くる五右衛門、彌左衛門裁の結
 こは張切てむづこ座し政右衛門殿今
 晩は其元に嫁入が有さ承はり御祝
 儀申に參つた老人の寸志を御覽下
 されや是はく婚禮を祝しての御發
 句でかな、先以て忝なしと押開き
 見て驚き顔フウこりや拙者への果し
 状でござるなチ、サハテ存じ寄らぬ
 先其意趣の次第はな、しれた事さ、
 科ない女房なぞ去つたハ、ハ、ハ、拙

者女房を拙者が去にお手前様は何
 故の御立腹、イヤサ言まいエ、く
 や、尤もお谷は上杉の家中和田行家
 が娘なれどお身ご蜜通して二人連此
 郡山へ駈込だ流浪の体不便に思ひ且
 はお手前が器量を見込殿へ申て有付
 せたはサ此五右衛門、其上勘當受け
 て親のないアノお谷身共が娘分にし
 て改めてお身にくれたれば以前は行
 家も娘にもせよ、今は身共が娘、少
 々の見落し有さても去れる義理では
 ないぞよ、イヤサく一旦の恩を忘
 れ外の女房持かへて此五右衛門を踏
 付た仕方エ、堪忍ならぬが夫共お谷
 に據ない科でも有か、サ、ハ、ハ、そ
 れ聞ふく返答次第座は立せぬと鰐
 打叩いて詰かけたりイヤもふ重々御
 尤千萬がお谷に微塵も科はなし去

た仔細は別儀でない、ごふ致したか
 飽ました。イヤモ女房さ言ふものは
 飽てから片時も持て居られるもので
 はござらぬサ、ハ、御立腹は御尤が
 爰をよふお聞きなされ只今拙者と討
 果されては五右衛門殿へ不忠に成ま
 せむやサなぞおつしやれ明朝御
 前において櫻田林左衛門と銀衛の勝
 負を致す此政右衛門是まで拙者を推
 擧なされ明日も已に以て勝負見分の
 役目を仰付らる、其元も拙者をさつ
 ぶりさ切てお仕廻なされてサ殿へは
 何と言譯はなさる、そ是非憤り暗
 ぬさ有ればハテ何ぞ致そふ武士の因
 果明日の御前を勤めて其後でお手
 かかりませふ暫く宥免下されと理に
 詰められて、さしもの五右衛門ムヤ
 コリヤ尤、意恨ば意恨御用は御用、

明日までは傍輩の役目中よし／＼ス
リヤ御得心下さるかア、忝いハ、
／＼然らば今宵は是に緩りご御
酒一献お上り下され追付新し女房
が参るイヤ又其器量のよき雪墨
の替徳、古女房のお谷めは不器量の
上に因果さ早ふ子をばらんで正眞の
河豚の横飛、ハ、ハ、ハ、イヤモ、飽
たを無理さは思し召なご愛疎盡しを
立聞の障子に齒形も入斗り登るつか
へを折しも有れ嫁御様早是へチ、待
余た早ふ通せ女子共ソレ燭臺に灯を
燈せ嶋臺銚子と騒ぐ程五右衛門がむ
かつき顔立關より奥座敷直に手操の
紙乗物對の簡筒に染込の覆ひも愛持
介添女房チ、太儀／＼イヤナニ宇佐
美公只今彼妻も参つたお祝ひ下され
ア、お目出度儀でござる御推量下さ

れヤ貴公には御退屈コリヤ／＼あな
たに御酒上いよア、イヤ拙者御酒た
べるご胸も悪くござる是は氣の毒然
らばお菓子イヤサお構ひ御無用ハテ
堅くろしい何かな御馳走コリヤヤイ
新参の女何をうる／＼まい／＼ご其
不調法では祝言の酌は得せまいお客
人の肝癢ソレ御眷中でも揉で上いご
言ふ程腹の立波に音を泣干鳥四海波
扱我等今晚の花簪袴を着る筈なれ
ご天窓から打解る様に角菱やめて此
儘の見参サア／＼早ふ女房共の顔が
見たいチ、お心安い御様で、嫁御様
のお仕合せ恥しがつてござらすミサ
ア／＼お出なされませせ、乗物明れ
ば綿帽子に腰より上げ埋もれて七ツ
斗りのいご様御宸尺にも合ぬかい取
ほら／＼帯につられて座敷にさんご

乳母は取て／＼ア、申其帽子はお盃
の濟まで召してござれア、イヤ／＼
憐さしからふ取てやりやぞれ／＼戀
女房の御面像さほうし取らせば尺長
もしまらぬけしの花嫁御直す三方土
器を乳母が持添戴かせ御君様へ上ま
するア、忝い／＼女子共皆見てくれ
何さまアちよつこりご何處に置ても
邪覓にならぬよい女房で有ふがな、
ハ、ハ、ハ、ハア嬉しい／＼目出度ふ
一つ次の間より千秋萬歳の千箱の玉
ご臨聲、襦の袖に通取乗立出るヤ
アお前は母様柴垣様さ驚くお谷に目
もやらず政右衛門に打向ひぐげんぜ
ない此娘を女房に持て下さるは此上
の本望なし御引出の此目錄は主人上
杉宇内様より笹志津馬に下されし敵
討御免の御書が彌々助太刀なされて

下さるマお心じやないヤモお尋ねに
 及ばず承知致して罷り有るコリヤ新
 參の女も能聞け身共には先妻が有た
 れ共な親の赦さぬ不義鬻通行家殿の
 勘當の娘され合女夫の悲しさは表立
 て舞男さいふ事はサならぬぞよ、今
 郡山の扶持を戴く政右衛門がよしみ
 もない他人の助太刀がサ成べきか、
 コレ此おのちはな世間晴れた行家殿
 の忘れ篋志津馬が妹に違ひない此
 子と今祝言すれば是こそ誠の舞男、
 舅の敵小舅の助太刀仕るさ殿へ御
 願ひ申さんによも不届きさは思され
 まじ、かなたこなたを思ひ斗つて料
 もない女房去た謂ればサ此通り、義
 理と言ふ色に迷ふて五年の馴染に見
 かへた心ヤコレくく汲わけて五
 右衛門殿御立腹の段々は眞平くア

「ブウ我等すんど酔ました何申すや
 らイヤモたわいく酒に紛らす本
 性の言譚聞て手を合せチよふ去て
 下さんした其誠なちつこの間も恨ん
 だ女子のまはり氣を堪忍してエーマ
 下さんせチサ身共もよい年をして
 疑ひの悪口ヤモ去りては面目ない
 ハアあつぱれ武士かな政右殿此祝言
 は敵討の門出武士道も立ち家も立つ
 アーよい嫁を迎へられた扱々目出度
 い婚禮我等も共々お取持さ始めの腹
 立打てかへ一度に顔のホーアーホー
 ハー、色直しハアお心なれ
 ば彌々かはらぬ政右衛門が後連のお
 後や二世かけてそなたの男今夜から
 抱いてれるぞヤコレ女房共くと言
 へどお後欠び交り乳母もふいのふ
 さやんちや聲、チー是は娘さした事

が嫁入早々いんでたまるものかいの
 三々九献まだ濟ぬ殿御の戴くものじ
 や、イヤあからばいやじや乳母あれ
 ほしい、あれさばムーお餓かへホー
 ー、チーさもししい奥様では有ぞア
 イヤく道理じやく可愛女房に
 何惜からん併し一つは過る半分は身
 が預る是が夫婦のかためぞ持せば
 ほやく餓頭えくばホンニ忘れた嫁
 君の御持參の御道具と簞笥の引出し
 廣蓋に盛ならべたる持遊びの市松人
 形風車七ツに成る子に殿を持せ濟し
 たしやんく濱松の音はざんざ座
 はかはられど我夫を夫さいはれぬお
 谷が心思ひやつて居るはいのそも
 じさはなさぬ中ほんの娘の此お後さ
 見かへさした繼母が舞殿に悪性根付
 たさ恨んでばしま下さんなアー勿体

ない事ばつかり私縁の切るのほこ
い様へ不孝の言譚政右衛門殿いつ迄
もあの子と添て下さるが家の爲志津
馬が爲、わしや死るまで去られて居
るが嬉しいはいのさ明し合親子の貞
心三國一思ひは富士の郡山解て涙を
汲かばす酒も裏に入しめくさ夜も
更渡れば稚子が乳母もう寢よふさち
いさむすチ、此お子わいの七つにな
るまで乳たべる子が有ものかソレ殿
御の手前もお恥なされア、イヤ大事
ないく是から新枕、腰元共床を
取身も追付寢るコソ乳母ソレ女房共
にし、やつて寢さしてやりやさいた
はり心付くに乳母のお倉が抱かへ
寢所に伴ひ入れれば政右衛門宇佐美
が前に手を突改めて五右衛門殿へお
願申上度仔細有りサア、役には

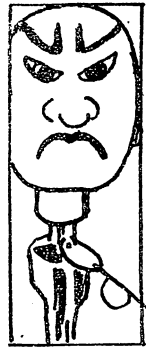
立すさ身共も力に成たい何なりとも
遠慮なふ承はらふサ、ごふかエへ、
くハア御深切、忝し近頃申乗たれ
共其元様には明日御前にて切腹なさ
れて下されいムサ其仔細さいへば明
六ツ時櫻田林左衛門と立合仰せ渡さ
れし此勝負に拙者負まするトハまた
なぜなサレバサ高の知れた林左衛門
打すへるは合點なれど勝は御前の御
意に叶ひお暇の出ぬ時は助太刀の望
叶はず御前に置いて此政右衛門もの
見事に打負けそれを越度に知行差上
溟人して思ふま、小舅の助太刀致す
所存、時には拙者も劔術を吹聴なさ
れた其元様負た我らが恥よりも見損
ふた御恥辱よもや生てはござるまい
腹なされにや成まい、是迄厚ふ御蟲
負下されさま、御恩に預かりし恩

を仇と申さふか腹切て下されと申出
すは五臟の血を一時に吐よりも苦し
けれ共舅の敵む討たさ志津馬に本望
達さしたい斗りにか様の不屈を申上
る御赦なされ下されと鬼を欺く政
右衛門わつと泣たる眞實に感じ入て
ム、尤もく命進上申すイヤモ何よ
りも安い事が只残念なば林左衛門め
に恥面かいせんと思ひしに返つて此
五右衛門面目を失ふて相果るは悔し
けれど貴殿が本望とげたれば其時す
いぐ暫しの無念誠有る侍の爲に劔
腹一つが役に立ば身に取て大慶ハ、
イヤ、くさ死るを常の武士氣質
アレ聞たか主人に預るお命を我々に
下さる、ソレ有難いとお禮申せ女房
どもさは言はれぬ表、親子共又言は
ぬ孝行勝べき勝負を負るも義心、

向ひ、謹で不鍛練の政右衛門を推舉致せし不調法恐れながら申譯さ言もあへす肩衣加返差添に手をかくる、ヤレ待て五右衛門アレ留よ御意じや切腹先待たれよ近習の聲々、アハくくこ斗り暫し控へてひれ伏せば櫻田林左衛門唐木政右衛門兩人共是に參れハアはつこ一度の答へさへ肩で風切る櫻田と唐木は枯ししほれ枝、見すばらしげに蹲るヤイ政右衛門只今の勝負大内記是にて逐一見届けたぞ其方が致し方ホ、神妙に思ふぞよこ仰にハアこ斗り夢見し心地一座の不審アイヤサ其方共は今の立合を何ぞ見た尤勝負は政右衛門負たれ

共、始めよりつくく見るに身構へ太刀揃ハアよつく鍛し誠の達人林左衛門の中々及ぶ所ならず彼が心を察するに新參の身を以て古參の者に恥辱をあたるは武士の情にあらずこ態さ勝を譲りしは鍛術斗りか心まで奥床し頼もし、政右衛門を取持した五左衛門身が爲には天晴忠臣誤りぞ思ふべからず又林左衛門事は怪我の勝をそれとも知らずいかめしく罵るは我藝の我で見へぬ不鍛練千萬知行くれば國の費へ暇をつかはず勝手に屋敷を立退べしと案の外成る御上意に林左衛門一句も上らず尖き殿の御賢慮に恐入たる一家中御前に叶

はぬ林左衛門何をうちく仕召るサ一早立召れさせり立られした、かぬに大廣間強將の元に弱卒なしと馬鹿の家來にや馬鹿なるわい身構へ太刀揃エ、馬鹿くしいア、此様な主人を持って居ちや生涯頭のあがるためにはないドリヤ歸つてくりまヤイ政右衛門うぬよつほど仕合せなやつだぞよごぞで急度此返報するウマ待ておるム、一人すこく立て行く重れて政右衛門に言ふべきは新參ながら其方武藝の鍛練感じ入る。二百石加増申付る。黒書院にて改盃今より一家中の師範さ成り彌々忠義を勵んでくれよさいと懇るに仰有し



彌作鎌腹の段

中 竹本文字太夫
野澤 勝平
切 竹本津太夫
鶴澤友次郎

人形

兄 彌作 吉田榮三
女房 おかや 吉田文五郎
菅野 和助 桐竹政龜
代官 七太夫 吉田玉松
狸の角兵衛 吉田玉徳

中 義士銘々傳

彌作鎌腹の段

この『彌作鎌腹』は奈河七五三助作の『いろは假名四十七訓』の六つ目にあたり歌舞伎から淨瑠璃に轉じたものであります。赤穂義士の一人萱野和助に絡る一哀話であります。いよく討入ご極つた和助が一人の兄彌作に最後の暇乞に訪れますが、兄から代官七太夫からの家養子の話から聞き實はご討入の事を語り、断ります。兄も代官へ種々ご断りますが、遂に弟の有望を打明けなければならぬ破目になり遂一事情を話し断ります。代官は一大事直に御注進ご馳出すので彌作は義と情の板挟みに一身

を犠牲にして弟の忠義のために代官を殺し自ら鎌で腹を切るさいふ熱涙はふり落つる時代世話の傑作です。

(床本) 彌作鎌腹の段 (中)

夢つんで小夢つんでお手に豆九つ九つの豆を敷そへて嫁の在所へ孫だきに、所も名におふ津の國かやの村の片邊りに百姓彌作が託住居、夫は家業の山稼留まはおかやがまめやかに晝げ拵へあたふたと歸る夫が門口から娘今戻つたチ、こちの人お前もまあ今頃までどこへ往て居やしやんしたサイノおれが戻りのおそいは此中から戻つて居た弟の和助が事じやムン和助様の事さばマア何でござんすへサアその譯を此間からわれにも相談しやうと思ふて居たマ、聞

てくれ、七太夫様のおつしやるには
 此所のお代官印南瀬左衛門様まだ後
 取むない故養子を仲入してくれさ常
 々のお頼みそちの弟和助は淺野の
 浪人じやそふなが戻つてゐるこそ幸
 ひ養子にやれそモ達てのお勤めおれ
 も弟も身の納り和助も定めて悦ばふ
 と戻つて見れば弟は内に居すモウ戻
 るかそ待て居る内早印南様へ養子の

七太夫様のお顔が立ぬご恩ご弟を思
 ひの餘り望み有さばしらにぎで神な
 らぬ身ぞ是非なけれ、おかやもごも
 にチ、それはマアよい事弟御もお
 代官様の養子にならんしたらお前も
 肩身が上る事早ふ和助様が戻らんす
 りやよいがサア出てから五六日にも
 なるかごふぞけふあたり戻ればよい
 と夫婦が待兼見やる瀬戸歸る。和助
 が大小も尾羽うちかれし浪人すかた
 兄者人只今歸宅さ内に入る。チ、和
 助様戻らしやんしたか今も今さてお
 前の噂さ大体待て、じやないぞへハ
 イ拙者も直様歸宅の筈フト古傍輩に
 出合同道にて大阪表へ参つたがイヤ

モ殊にない繁華の地されど有付の口
 はほさんごなくそれ故傍輩ごもいろ
 く談じ合ひ有付の勝手よき江戸表
 へ立越奉公かせぎの言合せ則ち今日
 アノ地へ出立武士は義を表に立れば
 此後は斯様の事有らんも知れず是今
 生の御暇乞、アイヤ今日お暇申し打
 立所存さそれと明せぬ身の望み口に
 言れど心の別れさばしらすして兄彌
 作コレ和助何も其様に氣を落す事は
 ないはい。そちが身の上は此兄も納
 て置たさいふはほかでもないコレ此
 所の郷土芝村七太夫様のお世話でお
 代官印南瀬左衛門様へそなたを養子
 にやる約束留守の中に堅めて置た。

モウろ／＼と有付さやらを尋ねるより地頭の養子に成れば其身の納り追付結納の印を持って七太夫様がござらふ程にそなたもお世話のお禮申しやさきおいかりし女夫が咄し聞居る和助も當惑咄胸是は又兄弟人産忽なる御相談先拙者に一應談合有た上ハテ扱そふ手延な事じやないはい是よふ物を合點しや城も國も取上られた淺野の浪人じやと聞たら抱へる者はない上に江戸三界でうしろ指さくれふより兄が詞に付て養子に行きやヤアイヤたさへよい事にもせよ養子の儀は幾重にもハテ扱片意地な兄が悪い事はせぬが達て否じやと云てく

れるご大恩請けた七太夫様へおれはごふも言譯がないテモ拙者にお尋ねも下されす約束召れたはこなた様の御不念ご申すものサ、其兄が不調法を繕ふてくれるも弟の孝行じやはいのイヤモ不得心を御立腹あつて兄弟者の御勘當を請る共此事ばかりはあつご申されぬサ其仔細はご言ふも言はれぬ誓ひの神文反古になさじご口ごもる何じや仔細があるム、其譯咄しやサ、いごふじや／＼サア其様子ごいふはモ他聞を憚る一大事なればム、呑込だ娘酒買てこいアイ／＼急に思案もつきますまい酒でも呑でゆつくりと相談したがよござん

しよご心通して女房は埃まぶれの缺徳利提て表へアコリヤ／＼ソレ隨分ひま入て買てこいよアイ／＼合點でござんす、したがこれ留主の中せり合め様エ、細言言はずさ早ふ行きやアイいてくるわいな、ドレ酒買て來ませふご足も輕げにちよ／＼ご出行影を見送りに弟が傍へひざすりよせ、サア女房は使にやつたはし折かゞみの兄弟中おれに言はれぬ事有まい譯を咄しやと問詰られ兄弟者人養子にまゐらぬ其仔細は申必ず他言して下さりまするな去年赤穂の本城明渡しの折柄國家老若大石内藏の助殿ご義を結びし諸士四十餘人モ何卒亡君の

仇吉良上野を討取御靈前へ手向奉

らんご或は町人乞食ごまで姿をやつ

し幾許の心勞艱苦此四五日他行致し

たは山科に御座有大石殿へ一味の輩

參會し彌々彼地へ發足の日限を定め

則ち今日乗船致し大阪表に罷在り原

惣右衛門殿さしめし合せ出立と契約

仕るモ醫へいか様の事有共口外せ

まじき神文は認しかが兄者人の御

心遣ひお慈悲の詞反古になす勿体

なさは非なく語る大事の一件他言は

必ず御無用たり。主君の爲に後樂を

捨忠義を守るが臣の道爰の所を聞き

譯て七太夫殿へ御斷り仰られ某に

武士道を立させて賜はるも猶此上の

兄の慈悲と頭を疊に摺り付けて頼む義

心ぞ誠なる。したり侍の性根と言ふ

ものはイヤ又違ふたものじや世間の

噂には淺野の浪人は皆腰拔、主の仇

は討もせず大石は祇園新地の一方に

うつゝぬかした大たわけ一家老の内

藏之助でさへあの通りと口々の取沙

汰は敵に油斷させて置いて思ひがけな

ふころりさいわす計略ごやらじやの

ア、何は兄に生れてもおれは生れ落

るご土百姓そなたはちいさい時から

親父様の言付で武家奉公仕やつたに

よつて魂も又格別じやなアチ、出か

しやつた、そふ言ふ事なら芝村様

の方は何なご斷いふ心置なふ上野を

討て名を末代に上てたもスリヤお聞

き譯下されふやチイノウハアハ、

い、有がたや忝なや折角思召給はる

お志を無にする段眞平御免下さる

べし某は大石殿に今一應談する事も

有れば行て参らん其間に兄者人芝村

氏にお斷を、しかし只今申した事必

す他言は成ませぬぞチ、よいはいの

ソリヤモよふ合點して居るはいの、

得ご御承知かな、弟これ見や商賣の

此鐵砲双び手に取ぬ法もあるはい、

ハア、成程其お詞にて拙者も安堵、

必らず心おかれなご出行足も忠の道

山科さして急ぎける。

(床本) 彌作鑪腹の段 (切)

後に彌作は只一人思案途方にくれけるが弟が段々の咄しを聞けば無理に共言はれずトいふて是迄色々水牢迄助けて下さつた大恩有る七大夫様が競ひかゝつてござるお仲間けさの様子では斷言たらてつきり御立腹は知た事、ハア、こりやどふ言ふてよからぞと、さつ置つの思案半ば斯く様子ば白壘を下部に持せ門の口、頼ふぞよ、芝村七大夫參つたりと聲に恟り廢忘しチ、是ばマア且那樣只今さつくりさ工夫してあなたへ參る所でござりますが餘り早にお出なされよふと挨拶ござまき氣をひやす、何のくそれに及ばぬ事ナニ可助其品是に置いて歸れ、扱彌作其方承知

の趣先方へ達したれば瀨左衛門殿殊のほか悦び直様あの方の一門中へ和助養子の一件披露致されし所先づは後名相續極りしと一家一門の悦び仲達致した拙者連も身の大慶則ち頼みの印として金子三兩小袖一重まだくくは是斗りでない、福有の印南氏と親類に成ま言ふは彌作其方浮み上つたと言ふものじや、ウマアハ、くくウフハ、くく、して和助は彌々承知かチ、承知で有らふくサ、一時も早く和助を同道ごふかく、さたくしかけ先越れたる詞にうろくマ、私お申ます事お聞きなされて下さりませ、ソリヤモウ今朝程お約束申まして直に弟に右の譯申きかしましてござります申且那樣大恩請たあなた様のおつしやる事

私ば承知でござります、ハイ私ば承知でござりますが、そこにむちやくちやさした譯ござりまして、ご後には詞も口籠る彌作コレサ彌作ソリヤごふ致した事だ、エ、何か和助が不得心さ申のかイエ、そふじやござりませぬ、けれど弟はナニチ侍がいやじやで、アノ町人に成つてもりでござりますすそふで、彌作何の事だエ、不承知なれば不承知さナセ其節に申さぬ今日の今に成つて左様な事印南へ申されふかサ、御尤でござりますく折悪ふ弟は四五日内におりませず漸々今日歸りまして右の咄し始めて致しました所にあれにも段々望の有そふで、だまれお身は我に何と言ふた大恩有七大夫様のお世話たごへ弟がいか様に申さふ共私も得

心させ屹度養子に上ませふと大丈夫に言つて歸つたぞよ。其舌の根もかはかぬ中、兎や角申はエ、聞へた此七太夫が取持つ頼みのか印氣にいらぬのじやなア、イエ、申そんな事ではイヤ、そふ聞ゆる、イヤサそふ見ゆるはいコリヤ何じやな兄弟申合せ有徳な町人へ仕稼へ金存分取遣はす工か、もしそふ成ては頼みの百イヤサ土百姓の其方等に七太夫馬鹿にせられてはな、武士道が相立ぬと印南より送つたる頼みの金子宙にて掘むおのの忿心無理おしにかさにか、つて罵りける。律氣の彌作氣もおろく、イエ、申し弟めは中々金銀に目のくれる様なやつじやござりませぬ何のお前様少々の事なら押付けても得心させまするがあれにも尤

もな様子もござります故それで私もぜひなふお断りをウンマテ、彌作弟に尤もな様子有さばそりやいかの仔細じやサ先其仔細を語れハイ其仔細申ますは、ナニごふも人に申されませぬ事でござります。イヤサ人に申されぬ事でも身共に語れば仔細が知れぬぞよ、サア其譯語れハイ伺さじや、ハイ、エ、ごふじやいサアごふも此事はお赦しなされて下さりませ、ム、スリヤ様子が有さ言ふも偽りじやないエ、申中々偽りではエ、置おらふ、こな土ほざりめがうぬもうよい、もう頼まぬ日頃正直な其方と思ひよしない事を約諾せしは、某が慮忽だ、今更誰をか根みんと言つて此七太夫印南に對し虚言者に成たチ、武士道が捨つた

はい、其言譯には此所にて切腹致す諸肌くつろげ、こ心に浮まぬ死用意サア今是にて切腹するは印南への言譯、其方への頼當だ、必ず留るな今切ぞ留るなく、今切がコリヤ彌作そちやマ胸忿な者じやぞよ、恩さいふ事知て居るか五年以前の水準は誰の影で助かつた女夫安閑として居るは皆身共が影ちやぞよわりや忘れたなサア今其方が了簡一つで七太夫を生そふ殺そふ有無の返答次第じやぞよ、恩をおもしに言ひまはされ身を裂るよりせつなき思ひいつぞ様子を言ふかイヤ、弟に他言せじこの契約立す何と詮方涙よりほかに返事はなかりける。ム、返答のないは不得心じやなもふ是非に及ばぬさおごしの刀抜放せば彌作取

付マア〜〜待て下さりませ、イヤ〜放せ切腹致すサア〜〜様子申ます〜マア〜お待なされて下さりませとおろ〜涙に絶り付きじろりこ見やりム、仔細語るかハイ申ます〜サ、ヨイハイ様子申さ有にア、達て切腹するでもないはいして其様子はナ、何さだハイ是はモごふも親兄弟の中でもめつたに言れぬ事なれど大恩あるあなた様が養子の約束ならずばそなへ腹切さまでおつしやる故是非なふ申ます。か申必ず人におつしやつて下さりますなご傍り見廻し膝すり寄せモ御存じの通り弟は淺野の家來去年の騒動にて一家中は皆散々中にも大石殿を頭として四十餘人の諸士が上野を討つて、弟も其中へ加はり今晚皆江

戸へ出立ごの物語、侍の道も立事そふにござりますれば爰の所を聞わけて下さりませと手を突て弟思ひに大望をむざと語るぞ是非もなき、七大夫吐息突て扱々思ひよらざる珍事を聞はいスリヤ大石が放埒も計略で有たよなヤ誰しも武士は有べき事だ數多有家中は離散し僅に残る四十餘人亡君の仇を討つとはハア、天晴や天晴其仔細を聞上はいかにも七大夫承知致したとサ言てはこつちの工面がア、イヤ〜彌作左程義心の萱野和助印南へ仲立するはサ此身の大慶、他門の外聞彌作いよ〜弟は貰つたぞよア、イヤ〜申しソリヤお前様御無理と申もの、何か無理だ〜彌作よくものを合點致せ其敵さ付れらふ吉良殿は高家職だは、首尾

よく本意を達した所も四十餘人は皆逆癡ここによつては一家一門兄弟成は其方までとふ言ふ筈に逢ふも知れず現在一人の弟を見殺しに致さふより、瀬左衛門殿へ遣せば一生樂々くらさるゝと言ふものだがそれ共達て不承知なればそりや身共は是にて切腹致すア、申〜そないな短氣な事サ、留るは弟に得心さすか、じやて、お前様、然らば切腹サアそれは得心さすかサア〜〜〜さきめ往生、徳利片手に女房が戻りかゝつて内の体見るに恟り分隔てマア〜待て下さりませ、こりやまあごふした事で彌作殿をヤア女の知た事でない、すつこんで居おらふサア彌作返答致せ何さ〜ハイ其様におつしやる事なれば弟が歸りを待て今

一應すゝめて見ませふかあなたか是
 にお出でなされてはごふもそこがヤ
 斯致しませふ、ごふを暫くお引取下
 さりませ。否やの返事を暮六つまで
 にムキつご返答致すか、ア最早八
 少過暮までは間もなし返答延引に及
 ばい此方より仕掛、和助ご對談、こ
 こによつては武士ご武士ごの論に及
 び打果そふも知れぬぞよ、エイサ、
 い、そこを無難に納るはそち達も働
 きだ性根をすへて返答せよごおとし
 の詞尖くも歎の態、鷹ひな鳥を引摺
 んだる兼ての工面無になす事かご門
 の口歩にも一思案、今聞たる様子で
 は義をかためたる和助が、魂中々變
 ずる所存もなし若彼も承知せずばま
 んまご取た頼の百兩印南へ歸さずば
 ならず折角首尾よふ暖まつたる金、

歸すは残念こりや一思案をムイチ、
 それよくご小うなづき足を早めて
 立歸るおかやは影を見送つて濟ぬ様
 子を汲んで出す茶碗片手にこちの人
 そんならごふでも七太夫様へ養子の
 變改をサイノ弟は段々入譯を語り
 斷り言ふし又あなたへ申せばい、今
 の通りじやご言ふてコレ所詮、弟は
 得心せぬ様子、おれが愚鈍から引出
 した此難儀か、ア、ひよんな事にな
 つたわいのご夫も悔みに女房も暫し
 途方に暮れるか氣を取直しこれ彌作
 殿何のママ其様に案じる事はござん
 せぬ和助様じやて、兄の難儀になる
 事じやご聞しやんしたら餘所に見て
 は居やしやるまい戻らんしたら又よ
 いやうに談合にもなるぞいな。こん
 な時には酒でも呑で氣をしつかりご

もたしやんせ爛してごふかへ、イヤ
 くおりやもふ酒も水も咽喉を通ら
 ぬごさしうつむいたる顔形見るめ涙
 につかかゝる瘡を押へてモ常々から
 突詰たお前の心あんまり義理を立過
 してひよんな事なご必ず見せて下さ
 んすなへ、二親に死別れ杖柱共思ふ
 て居るお前に、もしもあつたらば
 わしや何させふ、ごふ成ふご夫の膝
 に打ふして歎心ぞいぢらしし、心
 も夕陽いつきせき立戻る萱野和助兄
 者人芝村へ右の鬮り仰られしかハア
 秋の日脚も過たれば是より直様船場
 へ出立、なにおかや殿此間より段々
 この御世話此上ながら兄者人の儀宜
 しく頼存るご言ひ捨て出るをア、コ
 レくく待てたも扱まあ難儀なば
 七太夫殿じや斷り言ふを聞分す印南

の一家一門披露さしたれば武士が立ぬ此事ならずばコレマ減相な、この内で腹切と言はるゝはいのゝ、

これは又けしからぬ、不承知をいか申はそりやあの方の無理我儘サイノ無理は無理じやが雉子と鷹サここに段々と思有る人煩當に切腹さ長いものひねくりまはしてのせつば、所で右の譯でも咄したら扱はそふかご得心も有ふかごム言ひかけて見たれ共な、やつぱり了簡せぬはいのぞ聞て悔りナ、何ぞおつしやるスリヤアノ江戸出立の入譯をさあ是非のふ言ふたわいのエ、エ、はつさばかりに氣は轉倒兒が胸倉引摺みチエ、こなたはのふ他言せまじき神文の認めしと得ごこなたにさ言ふたでないか、それに大事を打明し一味徒黨の輩へ

何ぞ言譯有べきぞ、エ、死なしたり口惜しやご立たり居たり狂氣の如く譯は知れど女房も傍にうるゝ氣をあせる。光興心取直しハア、力なし猥りに口外せしは皆、某が料うぬ一大事を知たる七太夫住家へかけ込み討放し我も切腹そふじやゝと馳け出すを留る女房彌作は猶、和助の裾にしがみ付き弟待てくれゝゝゝゝゝゝ大事の事は言やせぬゝゝゝゝはいのふや何ぞサア何ぼおれが百姓でも大事の事は合點して居る、サ、言やせぬゝゝこれ氣を鎮めてたもマ、下に居やゝはてま下に居やいのふが今の様に言ふたはそちが心を引て見たのぢやチ、それ程までに魂をすへたらば敵イヤサアノ堅い奉公仕損じも有まいチ、出か

したゝゝなアハ、ゝゝゝこれ、和助たつた一つ兄が頼みがある。常々から強慾な七太夫最前の詞の端達て仲人したがるはてつきり先から禮物を受ける心そこでおれが思ふには、こつちも又斷り代さへ見せたらばこりや納りそふな事何を言ふても水呑百姓言にくいけれどそなた少々持合も有らば何ぞ兄に貸てもらぬかご餘義なき詞顔色を見やる目に浮露の玉兄者人お詞を背くと言段々御苦勞かけまするわい。なるほご彼は村役人ごにあなたのお恩あるもの、やお心にたらず共拙者はに金五兩配分の用金はにて無事に納る様イエ、申長道中の入用金、是かなふては和助様のアイヤゝゝ道連もござれば其儀は又いか様共さ差出す折しも打出す

鐘ア一騒動ぢや〜アレ暮六ツ
 鳴つて来た〜サ弟早ふ往て
 たも〜アソレか、濱の治郎
 作が所で下りの便船頼んでやりや、
 我も濱まで送てやれサ、行なら行が
 返事も遅いさ又七太夫様かサア、ふ
 いわい、来たらごふなごやつ付ける
 は、われが傍に居るさ向ふは侍人
 前作つて得心せぬは、よ、氣遣ひせ
 ずさ送つてやりやサ弟早ふいけア
 いか、送つてやれ、弟早ふ行〜
 早く往てくれ〜
 そんなら船場まで見送りませふヤ是
 は御苦勞、然らば兄者人いよ〜彼
 一儀仰せられぬに相違はないのチ
 言やせぬ〜はて扱て今のほほんの
 氣を引て見る斗り事をやつたのじや
 へ、おれも侍のフン兄じやはいさ立

派にいふて見送る兄、出ゆく弟は
 武士の引はかへさぬあづさ弓、矢猛
 心の残れ共是非なくおかやま引添ふ
 て船場をさして出て行く。間も有ら
 せず七太夫、鉢巻纏身輕の出立手鎗
 かひ込みつゝと通りヤア彌作あまり
 返答延引ゆへ身構へして參つたり、
 不承知ならば和助を出せ、此手鎗に
 て胸腹突抜討果す、何〜と氣を
 せいたり彌作さかふのいらへなく、
 しほ〜立て以前の白臺金の包さ俱
 に差出し旦那様あなた様へ對しては
 モ一言の詞も出ませぬがマア何かは
 さし置いて此進物お返し申ます、かは
 り、失禮ながら金兩お断りの印さ
 申し弟めはたつた今チニスリヤも
 ふ出立仕たかハイ留てもさまらず氣
 をせいでヤ〜ヤアさ表へかけ出

内に入、我慢の眼血走つて彌作が髻
 引搦みヤいあれ程まで詞詰致した
 に某にもしらす弟を出立させ
 僅かの目くさり金を突付け事を納ん
 だ計るこな〜横道者めこ
 りや印南より某へ送りし百兩いや
 さ身が武士も立ふかご踏つ擲いつ引
 搦廻しエ、爰な恩知らずの士ほぜり
 めがウヌ先達て米進に詰、水牢にて
 くだばる所を助けたる其大恩有某
 の武士道をよくも〜捨さしたな此
 上は大勢追手をかけ引さらへて和助
 めを討放す馳け出るを、纏り留め
 サア〜お腹立は御尤でござり
 ます〜おごふぞお情には私を
 づた〜にも切り刻み弟はゆるし
 てやつて下さりませ〜
 ヤアだまりおらふうぬも様な奴千萬

人切たまで刀様した、よいは我詞を
背きし返報、最前聞たる四十餘人の
者、上野を討んす企んで此上は京都
の西八條、薬師寺殿の下屋敷へ早馬
にて馳け付け一部始終を注進して褒
美の銀をアイヤ此舊慣を發せんま又
かけ出すをこれ申さ腰に取付身をふ
るばせまぬく待て下さりませく
くエ、放しおらぬかくくく
それを注進しられましては弟ばか
りじやござりませぬ四十餘人の衆か
大望の妨ごふぞく御了簡をヤア邪
魔ひろぐなと臆飛し怒に眼も暗紛れ
逸足出してかけり行く彌作今は絶体
絶命傍なる鐵砲追取て手早に込たる

玉薬火繩片手に表の方畔道を行く七
太夫が脊骨へごふぞ打込ばふすほり
返つて死てけり、ハア、くもふ叶
はぬくく所の役人殺したれば所
詮生ては居られぬ体、申七太夫様堪
忍して下さりませくく女夫がう
けた恩も送らず仇で返すも因果づく
もに死る言譚ごどつかご座して
山刀すらりと抜て手拭におし巻は巻
ながら遺下賤の手もふるい身もわな
くくエ、コレ立派に腹切ふと思ふて
も、ア、又物の光で氣がおくれる南
無阿彌陀佛くくチ、そふじや百
姓に似合た草刈鎌腹へ突當て一思ひ
ぞ探り取出す表へ足音、南無三寶ぞ

氣は轉倒當途も聞に打込む鎌アツト
ばかりに目もくらみ手足をもがき七
轉八倒のたうち廻る苦しみをしらぬ
おかやはいきせきまチ、マア此暗の
のに火も燈さす何して居さんす彌作
殿くく探り寄たる夫の傍手先にさ
はる鎌の刃先、血汐のした、りヤア
くくこりやお前腹切てか、ハア
はつこ玉ざるおかやが聲、提灯照し
萱野和助門口すつミヤア兄者人御生
害かこばくいかにご馳げよつて、
二人お介抱苦痛の彌作チ、弟戻つ
たか、ア、ハア、術ないくくは
いやい、ア、コレのるまいくくソレ
おかや殿しつかりぞ押へて居めされ

先明しを行燈へ手早に腰籠引切て、
 ぐつこしめたる即座の腹帯、申し
 兄者人和助でござりますお心儘に、
 が何故に此自害、様子は何さ、
 ナ、様子さいふたらア、面目ない
 ぐぐぐが一通り聞てくれ最前
 大望の咄し言ぬさいふたば、そちを
 なだめし偽り、のつびきならぬ手詰
 になり、江戸出立の一大事七大夫へ
 ものがたり武士さぐの意氣地了簡
 も有ふかと思ひのほかの強慾者、其
 一大事を注進して、褒美にするご馳
 け出す、留ても留らず是非なくも鐵
 砲にてたつた一討ちム、扱こそぐ
 船場にて胸騒ぎ合點行すご馳け戻る

途中にて鐵砲受けたる武士の死骸、
 すりやこなたが打留めてチ、役人を
 殺した彌作、追付召捕りに来るは知
 れた事案に居ればごもに難儀、サア
 ぐ一時も早ふ出立してくれ、早ふ
 ぐじやご申て、此体を見捨てば、
 イヤぐぐ大事を知たる此彌作親
 兄弟にも他言せまいこの神文反古に
 させまい此自害、サアぐ後構はず
 ご放立をさ苦痛を忍び弟を思ふ心
 の眞實心、兄の心を思ひやり有難涙
 おかやは猶あやも涙に正体なく、か
 ぶなる事も先の世の約束事ごは言ひ
 なから思ひもよらぬ憂別れこんな事
 ならお前より私か先へ死たなら今の

思ひは有まいに何をたつきにあすか
 らば暮そふものぞ情ない俱に手にか
 け殺してたべ、死たいわいのさかき
 ぐごき歎けば手負和助も俱に涙々は
 大川に落て流れていさやなほ水かさ
 まさるばかりなり。思ひがけなき敷
 かげより狸の角兵衛ぬつこ出で七太
 夫様を打殺し淺野の浪人が敵討の工
 み代官所へご馳け行を和助が手裏劍
 無残の最期、彌作思はず高笑ひハハ
 ーハハぐぐぐ敵討の血祭
 りよし、急いで出立ぐさいふ。聲
 さへも絶々に消え行く兄は死出の旅
 弟は直に忠義の旅頓て東の錦繪ご
 今に其名を殘しける。



道行初音の旅路

靜 忠

御前 竹本土佐太夫

信 竹本鍛太夫

ッ 竹本町太夫

竹本源路太夫

豊竹陸路太夫
竹本長子太夫

豊竹駒尾太夫
竹本小松太夫

豊竹葉美太夫
竹本津磨太夫

竹本文字佐太夫
竹本久太夫

次 義經千本櫻

道行初音の旅路の段
川連法眼館の段

淨瑠璃名作の代表的逸品です、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作になり、道行初音の旅路の段は義經の後を慕ふ靜御前の所持する初音の皷に隠れてくる狐忠信の振も床しき濃艶な夢幻劇で「川連法眼館の段」は其奥になつており十九年振の上場です。川連法眼の館に身を忍ぶ義經の許へ眞實の佐藤四郎忠信が奥州から歸つたところへまた忠信同道にて御出でその注進に二人忠信の條りとなり狐の化身の忠信は義經から初音の皷を戴き義經のために其通力を

以て守るさいふ錦繡美豊かな郷土藝術の獨壇上です。

(床本) 道行初音の旅路の段

M 戀さ忠義はいづれも重い、かけて思ひはばかりなや忠さまこそ武士に君が情さあづけられしづかに忍ぶ都をば後に見捨て、たびだちてつくらぬなりもよしつれの御行末ばなにはづのなみにゆられて、たゞよひて今はよしのさ人づてのうはさを道のしほりにて大和路さしてしたひゆく。見ばたせばよもの梢もほころびて梅がへうたふうたひめのささの男が聲々にわがつまがてんじやうぬけてすえるぜん、ひるのまくらばつがもなや、天じようぬけてすえるぜんひるのまくらばつがもなや、チーつ

猿系改め七代目

豊澤 助

豊澤 新左衛門

豊澤 友之助

豊澤 友太

豊澤 右衛門

豊澤 綱右衛門

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

豊澤 友太

人形

靜 御前 吉田文五郎
狐 忠 信 吉田榮三

がもなや、おかしからすの一ふしに
人も、わらやのそだちにも春ははれ
つくてまり、ひいふうつくづくさき
けばこち風音そへて、こそこの氷を徳
若にごまんさいさ君もさかしましま
すあいけふありや。たのもしやさぞ
なやまさの人ならば御かくれがない
ざ問はん、はれも初音の此つみ君
のさかへを壽きて、むかしを今にな
すよしもがな。たにのうぐひすもは
つれのつみみくしらべあやなす音
につれてつれてまねくさおくれげせ
なる忠信が旅すがた、せなに風呂敷
をしかさせたらおふて野みち、あぜ
みちゆらり／＼かるい取なりいそい
そさ、めだ、ぬ様に道へだて女中の
足さあなごつて嘸お待かれ、こゝ幸
ひの人目なしさせいめいそへて賜は

りし御きせなきを取出し、きみご敬
ひ奉る、靜はつみを御顔さよそへ
て上におきの石、人こそ知らぬ西園
へ御ごこの御かいしよう、浪風あ
らく御船を住吉浦に吹上られ夫より
よしのにまします由、やがてぞ参り
候はんさたがひにかたみをさりおさ
め鷹ごつばめはごちらが可愛や、を
育つるつばめが可愛い、花を見すて
るかりがねならば、ふみの便りも又
の縁エ、そふじやいなん／＼うたふ聲
々面白や實に此鎧を賜はりしも兄次
信が忠勤也誠にそれよ越方の思ひぞ
出る檀の浦の海に兵船平家の赤旗陸
に白旗源氏の強者アラ物々しやと夕
日影に長刀を引そばめ何某は平家の
侍悪七兵衛景清さ名乗かけ／＼な
ぎ立て／＼なき立つれば花にあらし

川連法眼館の段

中 豊竹駒 太夫
鶴澤重 造
切 豊竹古靱 太夫
鶴澤清 六
ツレ 鶴澤友衛 門

人形

佐藤四郎忠信 桐竹政 龜
源義經 桐竹紋十郎 龜
龜井六郎 吉田光之助
駿河次郎 吉田市 松
靜御前 吉田文五郎
狐忠信 吉田榮 三

のちりくばつこ木の業武者言ひが
ひなし出や旁々よ三尾の谷の四郎是
にありさ渚に丁ど打つてかゝる刀を
拂ふ長刀のふならぬ振舞何れ共勝り
劣りも波の音。打合太刀の鏝元より
折て引汐歸るかり、勝負の花を見捨
つるかま長刀小脇にかい込で兜のし
ころを引摺み後へ引くあしよるく
く向ふへ行足たちんくむんづ
ごしころを引切て双方尻居にごつか
ご座す腕の強さと言ひければ首の骨
こそ強けれさハハ、ハ、ホ、ハ、ハ、笑ひ
し後は入亂れ手しげきはたらき兄次
信君の御馬の矢表に駒をかけすへ立
ふさがるオ、聞及ぶ其時に平家の方
には名高き強弓能登の守籠經と名乗
もあへず、よつびいて放つ矢さきは
うらめしや兄次信が胸板にたまりも

あへず眞逆様あへなき最期は武士の
忠臣義士の名を残す思ひ出るも涙に
て袖はかばかぬつゝ井筒いつか御身
ものびやかに春の柳生の糸ながく枝
をつらぬる御ちぎりなごかばくちし
かるべきさたむひにいさめいさめら
れ急ぐとすれどはかごらぬ芦原峠け
うのささ、つちだしたども遠からぬ
のちの春風吹はらひくもさ見まかふ
三芳野の麓の里にぞつきにける。

(床本) 川連法眼館の段 (中)

鶯の聲なかりせば雪消へぬ山里い
かて脊を知らまじ春は來なから春な
らぬ九郎判官義經を御慰めの琴三味
や河連法眼が奥座敷音じめも世上忍
び胸柱に立る鷹金も春を見捨てぬ
志、げに頼もしきもてなしなり。

かかゝる所へ取次の侍罷出、佐藤四郎兵衛忠信殿君の御行衛尋れ御出なりと案内にて、入来る四郎兵衛忠信御座の間のこなたに出、絶て久しき主君の顔見るも無念の荒涙指うつむいて詞なし、大將御機嫌斜ならず汝に別れ此處かしこ鎌倉殿の御詮議強く身の置き所なかりしに東光坊の第子川連法眼に匿はれ、心ならざる春を迎へ暫くの命をつぐ。我姓名を譲りし其方命全く有る事我運のまだ盡ざる所、頼もし、悦ばし其砌預けたる辭はいかじ成しぞご御尋有ければ忠信いぶかしげに承はりこへ存じがけなき御仰八嶋の平家一時に亡び天下統一統の凱歌を上げ賜ふ折から告来る母の病氣聞し召及ばれ御暇賜はつて本國出羽へ歸りしは去年

三月程なく別れし母も中陰忌中に合戦の疵口におこづき破傷風さいふ病に成り既に命も危き半御兄弟の御中さけ、堀川の御所没落と承はる口惜さ、胸を煎程重る病氣無念と餘つて腹切んと存ぜしむとせめては主君の御顔はせ今一度拜し奉らん念願叶いて本腹遂げ初立の長旅忍びの道中恙なく此館に御入と承はり只今参つた忠信に姓名を賜はりし辭御前を預けしなご御詮の趣かついて身に覺へ候はずと言せもあへず氣早の大將ヤアとばけな忠信堀川の館を立退し時、折よく汝國より歸り辭が難儀を救し故我が着長を汝にあたへ九郎義經さいふ姓名を譲り辭を預別れし其方世になき我を見限つて辭を鎌倉へ渡せしな。義經が有家捜し

に來たか只今國より歸りしとばまさしく偽表裏。漂泊してもうつけぬ義經欺らんとは推参なり不忠二心の人外めアレ引くつて面縛させよ龜井駿河と腹立の聲にかけくる二人の勇士、裾ばせ折て忠信の弓手馬手に反打かけ委細あれにて皆聞た。サア腕廻せ四郎兵衛靜御前の御行衛サア明白に白状せよ踏付けて繩かけふか。拷問して言せふかサアごふじやませりかけられてせん刀指添共に投出し兩人待た産忽すな。待せば但言譯有か。サア聞ふサアなんど何と何々に難儀の最中靜御前の御供申し四郎兵衛忠信殿御出也と奏者も聲に人々仰天何忠信も又來たとは合點行かすも聞もあへず以前の忠信立上り我名をかたるは何でも曲者、引く、

つて大將への面晴せんさ馳け行くを
ヤアならぬ〜詮議の濟まで動きぬ
さ龜井が向ふをさ〜へたり。ヤアさ
なせそ六郎、忠信是に有上に又忠信
が辭を同道何にもせよ仔細であらん
片時も早く是へ通せあつこ龜井は次
の間へ我身あやぶむ忠信は黙して様
子を窺へば別れ程經し君も顔見たさ
逢たさこつかはさ川連の奥の亭歩く
る間もさけしなくノウ我君かなつか
しやさ人目厭す絶り付戀し床しの溜
々を涙の色にしらせけり。お、チ女
心に歎くは尤、別し時言聞せし如
く人の情に預る義經、輪廻きたなき
振廻ならねばつれなくはもてなした
り、忠信を同道さや、いづくに有り
と尋賜へばたつた今次の間まで連立
て参りしが爰へはまぢかき見廻し見

廻しそれ〜くても早ふ爰へ来て
じや一所にお目にかゝるものをちつ
この間に先へ抜がけまだ軍場かと思
ふてか、まんぢちな人では有さ恨口
なる詞に不審一倍暗ぬ四郎忠信我君
も其こそく覺なき御尋、拙者めは今
の先出羽の國から戻りがけ去年お暇
申してからお目にかゝるは只今始て
エ、あの人のじやら〜きてんこう
な事斗りてんごうでなし大眞實アレ
まだ眞顔でだますのかさ何氣も媚く
詞の中、立戻る龜井の六郎辭様同道
の忠信引立來らんぞ存ぜし所次の間
にも有合さす玄關長屋所々方々尋て
も知れ申さす候、さ申に心迷はせ賜
ひコレ靜爰に居るは其方を預たる忠
信ならず只今國より歸りしと物語す
る中忠信辭を同道この案内二人有中

にも見へざるは不審者面体似たる賢
者ならずや、靜心が付さるかさ仰の
中に忠信をつれぬ〜と打なかねハア
ごふやらそふおつしやれば小袖も形
も違ふて有るア、お待遊ばせやハッ
アそれが是かチ、そふじや思ひ當る
事、有君も僅さ別れし時賜はりし初
音の鼓御覽遊ばせ此様に肌身も離さ
ず手にふれて忠信の介抱受、八幡山
崎小倉の里所々に身を忍び居たりし
に折々の留主の内君戀しさの此鼓打
て慰む度々に忠信歸らぬ事もなく其
首を感に絶る事ほんに酒の過た人同
前打やめばきまよるりつこ何氣ない顔
付はよく〜鼓も好そふなこ初手思
ひ二度三度四度めにはてもかはつた
事又五度めはふしき立六度めにはこ
はげ立夫よりは打たざりしが君は爰

にこ聞つけん心せく道忠信にはぐれ
 た時鼓の事思ひ出し打ばふしそや目
 の前にくる共なく見へたるは女心
 の迷ひ目かと思ふて連立來りしに又
 此時宜はごふそいのご申上れば義經
 公ムウ鼓をうてば歸り來るさは夫ぞ
 よき證議の近道靜そちに言付けける其
 鼓を以て同道した忠信を證議せよ。
 あやしい事有らば此刀でこ投出し我
 手で打れぬ鼓の妙音それを着に一献
 くまん早々鼓打々と言捨奥に入賜へ
 ば龜井駿河も忠信にひつ添いてこそ
 入りにけれ。

(床本) 川連法眼館の殿(切)

園原やはいきなりで有さ見し人の
 身のういぶかしく窺ひ出る足音も靜
 は君の仰を受け手に取上げて引結ぶ

しんき深紅をない交の調へ結んで胴
 かけて手の中しめて肩に上手品もゆ
 りに打ならす聲清々澄渡り心耳を
 澄す妙音は世に類なき初音の鼓の彼
 洛陽に聞へたる會稽城門の越の鼓斯
 くやと思ふ春風に誘は來る佐藤忠信
 靜む前に兩手をつき音に聞取れし其
 風情すわやと見れど打ち止まず猶も
 様子を調の音色聞入り聞ける餘念の
 体慳しき者とは見て取る靜折よしこ
 鼓を止め遅かつた忠信殿我君様のお
 待兼、サア／＼奥へご何氣なき詞に
 はつこは言ながら座を立ちおくれ
 指うつむく油断を見濟し切付るをひ
 らりそ飛退き飛しさりコハ何さなさ
 るいぞご咎められて氣轉の笑ひホ
 い、い、チ、あ、の、人、の、氣、疎、い、顔、久、し、ぶ
 りの靜も舞見よふご御意遊す故八嶋

の軍物語りを舞の稽古と鼓を早め斯
 て海平入亂れ船は陸路へ陸は磯へ漕
 寄せ打出で打ならず鼓に又も聞入つ
 て餘念たわひもなき所を忠信やらぬ
 さ又切りかゝる太刀筋かはしてかい
 くゆるを付け入柄元しつかご取り何
 科有てだまし討に切らるゝ覺へかつ
 つてなしと刀たぐつて投捨つれば實
 忠信のサア白狀仰を受けた靜の證議
 言はずばかうして言はするご鼓追つ
 取りはた／＼／＼女のか弱き腕さき
 に打ら立られてハア／＼／＼はつこ
 誤り入つたる忠信に鼓打ち付けサア
 白狀サア／＼／＼サアミ詰寄られ一
 句一答詞なく只ひれ伏て居たりしむ
 漸に頭をもたげ初音の鼓手に取上
 さもうや／＼／＼しく押戴／＼靜
 の前に直し置きしづ／＼立て廣庭へ

おりの姿もしほくさ身すぼらしげに手をつかへげふが日迄隠しおいせ人にしらせぬ身の上成れ共今日國より歸つたる誠の忠信に御不審のかゝり難儀さ成る故據なく身の上を申上る始りは夫なる初音の皷桓武天皇の御宇内裏に雨乞有りし時此大和國に千年の功經し牝狐牡狐二疋の狐を狩出し其狐の生き皮を以て拵へたる其皷雨の神を諫めの神樂、日に向ふて是を打ば皷は元來波の音、狐は陰の獸故水を發して降雨に民百姓は悦びの聲を初めてあげしより初音の皷も皷賤る、其皷は私の親私めは其皷の子でござりますと語るにぞつこはげ立騒ぐ心を押ししづめ、そのなたの親は此皷の皷の子じやさいやるからは扱てはそなたはマ狐じやのハ

ツア成る程雨の祈に二親の狐を取られ殺された其ときは親子の差別も悲しい事も辨へなきまだ子狐藻を被程年しも丈け鳥居の數も重れど一日親をも養はず産みの恩を送られば豚狼にも劣りし故六萬四千の狐の下座に着只野狐さ下しまれ官上りの願も叶はず親に不孝な子が有れば畜生よ野良狐ぞ人間ではおつしやれ共鳩の子は親鳥より枝を下つて禮儀を述鳥は親の養を肯返すも皆孝行、鳥でさへ其通りまして人の詞に通じ人の情けも知る狐何ば愚痴無智の畜生でも孝行といふ事をしらいで何ぞ致しませうくぞいのさば言ふものゝ親はなしまだも頼みは其皷千年功ふる威徳に皮に魂留つて性根入たば則ち親付添て守護するはまた此上の

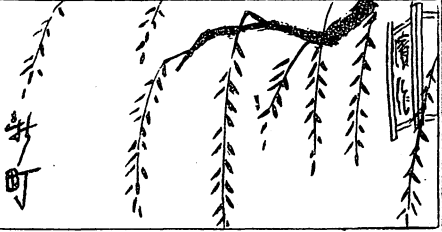
孝行と思へども淺ましや禁中に留置賜へば八百萬神宿直の御番恐れ有れば寄付れず頼も綱も切果しは前世に誰れを罪せしぞ人の爲に怨する者狐さ生れ來るさいふ因果の經文恨めしく日に三度夜に三度五臟を絞る血の涙火焰と見ゆる狐火は胸を焦する炎そやかほご業因深き身も天道様の御恵みで不思議にも初音の皷義經公の御手に入内裏を出づれば恐れもなしハツア嬉しや悦ばしやま其日より付き添は義經公の皆お蔭稻荷の森にて忠信が有合さばその御悔みせめて御恩を送らんご其忠信に成りかはり醉様の御難儀を救ひました御褒美さ有つて勿体なや畜生に清和天皇の後胤源九郎義經さいふ御姓名を賜はりしは空恐しき身の冥加是さいふも我親

に孝行が盡したい親大事くと思ひ込んだ
 心が届き大將の御名を下されしは人間の果
 を請けたるも同前彌親が猶大切片時も離れ
 ず付添鼓靜様は又我君を戀慕ふ調への音
 かはらぬ音色と聞ゆれ共此耳へは二親も物
 言ふ聲と聞ゆる故呼び返されて幾度か戻つ
 た事もア一ござりました。只今の誠の音は
 私故に忠信殿君の御不審蒙つて暫らくも忠
 臣を苦すは汝も科早々歸れと父母の教の詞
 に力なく元の古集へ歸ります。今迄は大
 將の御目を掠し段お情には靜様お詫なされ
 て下さりませと、椽の下より延上り我親鼓
 に打向かはす詞のしり聲も涙ながらの暇乞
 人間よりは睦まじく親父様母様お詞を背ま
 せず私しはもふお暇申します。さば言なが
 ら御名残おしかるまいか、二親に別れた
 折に何にもしらす一日く立に付暫らくも
 お傍に居たい産みの恩を送りたいと思ひ暮

し泣き明かしこゝれた月日は四百年雨乞故
 に殺されしと思へば照る日が恨しく曇らぬ
 雨は我涙願ひ叶ふが嬉しさに年月馴し妻狐
 中に設けし我子狐不便さ餘つて幾度か引る
 心を胴慾に荒野に捨て出なむら飢はせぬ
 か凍はせぬか若獵人に取られはせぬか我親
 を慕ふ程我子もてうご此様に我を慕わふか
 と案じ過しむせらるゝは切つても切れぬ輪
 廻のきづな愛着の鎖に繋ぎ留られて肉も骨
 身も碎くる程悲しい妻子をふり捨て去年の
 春から付き添て丸一年立や立す逝と有るこ
 て何さまあつて申て逝れましよかいの
 くお詞背か不孝さばなり盡した心も水の
 泡せつなさか餘つてかへる此身は何たる業
 まだせめてもの思ひ出に大將の賜はつたる
 源九郎を我名にして末世末代呼ばるゝ共此
 悲しさは何とせん心を推量し賜へ泣つく
 ぞいつ身もだへしごうと伏して泣き叫ぶは

温
 即席御料理
 電新話町臺九番

清作



大和國の源九郎狐と言傳へしも哀なり。靜
 ばさすの女氣の彼も誠に目もうるみ一間の
 方に打向ひ我君それにましますかこ申す内
 より障子を開きテ、委しく聞届し扱ては人
 にてなかりしな今迄は義經も狐さば知らざ
 りし、不便の心さ有ければ頭をうなだれ禮
 をなし御大將を伏拜く座を立ば立ちながら
 賊の方をなつかしげに見かへりく行く
 さなく消る共なき春霞人目に瞳に見へされ
 ば大將哀ご思召しアレ呼び返へせ鼓打て音
 に連れ又も歸りこん鼓々さ有りけるにぞ靜
 は又も取り上げて打ば不思議や音は出ず是
 はくご取直し打て共くこはいかに上共
 平さも音せぬはハア扱ては魂残す此鼓親子
 の別れを悲しんで音を留めたよな人ならぬ
 身もそれ程に子故にものを思ふかご打しほ
 るれば義經公チ、我さても生類の恩愛の節

義身にせまる一日の孝もなき父義朝を長田
 に討たれ日かけ鞍馬に成さ長りせめては兄
 の頼朝にこそ身を西海の浮き沈み忠勤仇なる
 御憎しみ親共思ふ兄親に見捨てられし義經
 か名を讓つたる源九郎は前世の業我も業、
 そもいつの世の宿願にてかゝる業因なりけ
 るぞご身につまさるゝ御涙に靜ばわつこ泣
 き出せば目にこそ見へれ庭の面我が身の上
 ご大將の御身の上を一口に勿体涙に源九郎
 たもち兼たる大聲にわつこ叫けべば我れご
 我が姿を包む春霞はれて形を現せり義經
 御座を立給ひ手づから鼓み取上て、ヤイ源
 九郎靜を預り永くの介抱詞には述べたし
 禁裡より給はり大切のものなれ共是を汝に
 得さするご指出し賜へば何其鼓を下されん
 ごやハアくく有難や忝やごがれ暮ふ
 た親親御辭退申さず頂戴せ入重々深き御恩



優秀品紹介

この冬は防寒用として
 大衆向

フェルトカラーと

高級品

セームカラーが

洋服黨を完全に風
 靡して居ます。

なぜ

それは、肌さわりのよい。

暖い。丈夫なの。

三拍子そろつてゐるから

今一ツ

本カラーが、模造品の粗
 悪なるに比し、斷然優
 良な事を一般需用者より認
 識して頂ゐるため。

到る所の洋品雜貨店
 にて販賣

のお禮今より君の影身に添御身の危き時は
 一つ方を防 奉らん返すくも嬉しやな
 ナ、それよそれ身の上に取り紛れ申す事愈
 つたり一つ山の悪僧ばら今夜此館を夜討ち
 にせんぞ企てたり押し寄せさするまでもな
 し我も轉變の通力にて衆徒を残らずたげか
 つて此館へ引き入く真向立割車切、又一
 時にかゝりし時蜘蛛手かけ繩十文字或は右袈
 裟左袈裟上を拂へば洗で受け褌を拂はひ
 らりさ飛びいしやう秘術は得たりやく御
 手に入れて亡すべし必ずぬからせ賜ふなご
 鼓を取つて禮をなし飛む如くに行末の後を
 くらまし失せにける。

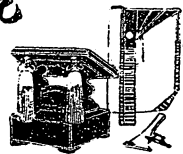
儀太夫海階水做元

見佐舟共舟遊り道具

電話船場
一八六二番

加島屋 舟中清助

大坂市東區唐物町四丁目御堂筋西へ入





山名屋の段

切 明烏六花曙
山名屋の段

浦彦おお勤時み
里六辰や衛郎次
竹本南都太夫
竹本島太夫
竹本源路太夫
竹本貴鳳太夫
竹本長尾太夫
竹本鏡太夫
竹本文太夫
竹本龜太夫
野澤吉彌
鶴澤小庄
鶴澤友駒

人形

浦次郎里
吉田文十郎
吉田榮三郎
吉田扇兵衛
吉田小太郎
吉田玉吉
手亭髪やり
代主結み
彦勤手おど
六衛兵おか
六衛辰かや

この淨瑠璃は嘉永六年二月大阪新築地綱大夫座に淨瑠璃の初演を開けたもので初代鶴賀若狭之掾が自分節付した新内節に初まり江戸藏前の伊勢屋の次男伊之助が吉原の遊女三芳野の情死を脚色したもので淨瑠璃として上方氣分の廊情緒が濃厚に漂つてゐる繪畫味なものであります。


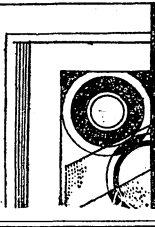
(床本) 山名屋の段

座敷も靜なる、雪ばまだ、残りて寒き春の風、吹暗れぬ身の浦里が湯上り袂其儘に、禿の縁打連れて、上がる二階の部屋の内、それと縁が黄

盆、煙に憂さは暗らしても、暗れぬ思ひの時次郎。誰戀人ぞ夕間暮、寝かれて今は山名屋の、浦里にさへ怨めしく、人目の鬨を忍ぶ身の、雪の夜道を迷ひ来て、癖の外面にしようぼりさ、詞あり、浮世の中さはいひながら、水の流さる人の行末、先達て御主人の重寶、臥龍梅の一軸、紛失したる我過り、夫故に勘當うけ、忍びに詮議すれども、今に於て手懸もなく、浦里にまで憂き苦勞、廻せば廻す程、是迄契りし効もなく、通ひ廓に咲く花の色香も深く馴染めし、浦里にまで今ばはや、逢ふ事さへも儘ならぬ、浮世の中の有様かこ身の成果の悔みこそ、夫さも知らず喃縁、其方に渡した昨日の文、見付られぬやうに、持つて往つてたもつ

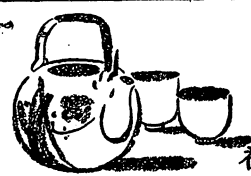
たか。そりや氣遣は御座んせぬ、時さんに直に渡しました。あゝ、これ聲が、高い、もそつと靜にいやいのう。あいと縁が心得て傍をそつと高欄より、塀の外面を見下して目早く縁が。あれ申し、詞時次郎様が塀の外に、來てゐさんすわいなあ。さ聞くに嬉しき浦里は、走懸つて高欄に、手をかけ乍ら仰上り。詞時様、よう逢にきて下さんしたと、いふに思わす時次郎、振仰向けご松ケ枝に、せきくる涙はらくと、互に積る懸の淵心に濡るゝばかりなり。折柄來懸る足音に、はつと驚き立上る、機轉利かして禿の縁、延を丸めて塀の外、投遣る報せに時次郎、様子あらんご用水の、陰に隠れて忍びある。部屋の戸明けて髪結のお辰、夫と見るより。オ、花魁へ、詞無待遠に御座んせう、最前から氣が急いで、早う來たいご思ふ程、意地の悪い、今日は澤山仕事

も支へ、又彼方此方の部屋々々から、呼びに參じてあるけれど、勿々にして抜けてきた、併し花魁、お前は強う濟まぬ顔、目元も潤み、ごぞ悪う御座んすかへ、これ縁些と氣を付けて、薬でも上やいのう、あい最前から爾う思ふてゐやんすけれど、薬は厭じやさいひやんす。チ、縁のいやる通り些と氣分も悪けれど、薬服むのも厭になり癖いれるのも強う好かぬ程に、お辰様今日は廢にしやんしよ。チ、爾うじやて、其まあ髪のはらつき様、つい一寸櫛入れたら、お前の心の縫れ髪、最うさつぱりご氣も暗れさうな様じやぞへ。チ、お辰様のいはんす事わいの、假令縫れる氣が暗れても、恚う結目が緩んでは、つひばらくにならうかご、夫が悲しい、ホ、い、い、氣に懸る事わいな。さあ其氣に懸る結目を、しやんと止めるが私の手の内、まあ鏡臺にぞ無理


新聞広告
 柳川
大阪電報通信社


遣りに、勸められても進み兼ね、向ふ鏡は曇られど、通ふ心の穢に出づる、色目を緑が酌取る目遣ひ、外さぬ顔で吸付くる、煙草の煙空に吹く。お辰も流石物馴れし、世間咄を取混ぜて。詞いや申し浦里様、モウ世間の事と言ふものは、其身にならねば知れぬもの、私も昔思出せば、滿更恚うでもなかつたが、恚ういへば可笑い咄するやうなれど、まあおいらん、まあ一寸聞いて下さんせ、あの私がやうな見つともない女子でも、喩へにいふ鬼も十八さやらで、ごないにか思ふてくれたが、今の主じやわいなチーイヤ、思わず知らず色々、事請させてチー氣の毒やよ、ホー、マア、今のが濟んだと思わんせ、サア深うなつて外て、モウ何の事はない、指切、髪切さいふ様になるご、コリヤ友達に恚した事で金が要る、二歩貸せ、三歩貸せ、サア了ふた、

コリヤ小遣の錢箱にしられたわいと、思ふたれど、サア迷ふたが因果、エ、儘よ、若い時は二度はないご、仕面工面して、到頭小袖箆も何時の程、狀の取遣澤山に、紙屑が一杯詰つた揚句には、心中に出ようご乗が来た所、常から仲好い友達が、留めてくれたが幸ひとなつて、今では女夫が氣安う暮す、モウ恚うなるご榮耀の八百、モウ一寸氣に入らぬ事があるご、ヤイ出て失い暇遣るわと、モウ憎てらしい、愛想もこそも盡果てる、千年の戀も覺めるご、よういふた事じやご、サ思ふも年の功丈じやわいな。チーお辰様とした事が、私等が様な勤の身で、可愛と思ふ人も無し、思ふてくれのお客も又、廣い世界にないものじやわいなア。サアくくそじやわいな、爾うはいふもの、花魁も今が戀盛り、毎夜々々のお客にも、深い可愛い、最う命も遣り



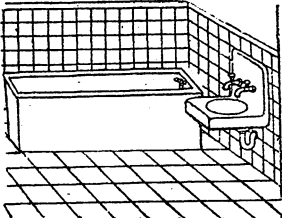
大和御池橋
茶筌

電話新町二番三番

たいさいふやうな主が出来ると、サア何が親方は堰く、逢はれはせず、せう事なしに突結めて、長い命を短うする事、私に身に覚えがある、殊に又其中、此縁さいふ様な可愛らしい子でもあると、無分別は出されぬ、義理さいふもの、可愛さいふもの命あつての事いな、チ、是はしたり、ついに咄に身がいつて、モウ色々事をチホ、詞ドレ、是から向ひの屋へ往て参ぜう花魁さらばさいひつゝも、降りる梯子を廻り縁、そつと切戸を明けて出る。お辰は二階を振返り、詞コレ縁、勝手へ廻ると隙がある、此切戸から向ひへ行く程に、部屋でナソレしつばりと締めてたもと、小陰に忍ぶ時次郎を、無理に押遣る切戸口。ばつたり締めて左あらぬ顔、傘振かたげ小提灯、提げてお辰は急ぎ行く。人の情に引入られ時次郎は段梯子、疾しや遅しと駈上り、走

寄つて浦里が、手に手を執つて緊め泣きに只咽び入る斗りなり、涙ながらに時次郎、何時迄くどき歎いても、歸らぬ今の我身の不運、逆も生きては居らぬ此の身、和女も共にさいひたいが、二人一緒に死すならば跡で可愛や此縁は、どうなるものぞ不惑やな、今死ぬる身を存へて、我去き跡で一片の、回向を頼む浦里と、聞く程せきくる涙ながら。ソリヤ餘りじや情ない。今宵別れて私が身や、可愛縁は何とならうと思わんす。死なねばならぬ覺悟なら、三途の川もコレ此様に、親子手を執り諸共と、何故にいふては下さんせぬ、氣強い男とばかりにて、身を願はして泣居たる、心ぞ思遣られけり。折柄遣手の聲として、浦里様々々、一寸お目に懸りたい。ちやんと降りて下んせ、早うと急忙なく、喚き乍らに段梯子上る足首浦里が、胸に轟き時次郎を

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所



西區立寶堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
岡部商會支店
阪急夙川
電話新町(六二七六九)
電話西宮(一九七六)

無理に炬燵へ忍ばずれば、縁は機轉在合す
 夜着打着せて立退けば、左あらぬ体。チ
 いかやさんとした事が、仰山な何の用で
 御座んすへ。エ、何の用くさ白々しい。
 サアお前に些さうがある。旦那さんが呼ん
 で来さいはんした、縁も一緒にきりくご
 さんせと、引立られ、何と應答も浦里が、
 心を残し炬燵より、胸の動悸の遺瀨なく、
 禿の縁諸共に、呵責の鬼に迫立られ、悄々
 たつて行く跡から、四邊を睨むかやが目の
 光輝く奥座敷、引立て、こそ、ゆく空の
 闇は綾なし浦里がふさがる胸の氷より冷た
 さ怖さ禿の縁、袈に響く駒下駄の、音も鋭
 き縁先の、障子明くれば主の勤兵衛、火鉢
 に差込む鐵灸の、さも物凄き其顔色。じろ
 りと見て、詞コリヤ浦里、其方に尋ねる用
 事さいふは、外でもない、わりや時次郎さ
 いふ毛二才めに、何ぞ頼まれた事かサアあ

らうかな、有様に叫して聞かせと、詞旦那
 様のお詞なれど、わたしや誰にも頼まれた
 覚えは更に御座んせぬわいな。フン逆も此
 分では吐かしをるまい、可しくコリヤお
 かや、最前命令た通り、庭の立樹に縛し上
 げ、白状させよと鋭き詞。アツトおかやが
 立寄つて、泣入る浦里引き起し、上帯解い
 て縛上げ、雪持つ松の荒皮も、咬めるばか
 り縛り付け、庭に有合ふ竹箒、振上げて。
 サア浦里様、詞う叶はぬぞへ。ありやうに
 白状さんせ、ア、餓鬼の様になつてある時
 次郎めに、心中立て、意見しても拔歩き、
 其お報かきたのもコレ、私が業では御座ん
 せぬぞへ、必ず恨んで下すな、日頃の事
 は扱措いて、最前も旦那様に、やつくご
 いつ託言しても、お聞入遊ばさぬ、生命な
 れば是非がない、白状さんすりや其通り、
 痛い目せぬ中、サ云はんせと、囁付く如く



現
代
的

電話 三三七五六番

罵るおかや。何と應答も泣入る浦里。エ、しぶさいと振上ぐる。箒持つ手に取絶る、縁を突退け、匆退けて、りう／＼はつしと打擲く。擲きたられ浦里が、髪も形も取亂す雪の膚にいこそ猶、見るに悲しき稚氣に主の方を伏拜み、おかやが裾に取付いて。最う堪忍して上まして下さりませと、歎く縁を引摺み。儕も共に見懲と、上締の粗引解き、後手に縛り付たる其有様、物をも云はず主の勤兵衛、鐵灸引提げ、庭の面、泣沈みたる浦里が、髻擷んで聲荒らげ。詞ヤア斯様に殿しく折檻するも、儕か心に覺あらう。此勤兵衛が預り置いたるア、アレアノ床にかけしは金岡が一軸、詮議など、は片腹擦れる。コリヤ。この事を時次郎に頼まれたに相違無い。さあ眞直にぬかしおらふ、サア左様な事、頼まれし覺えは御座んせんわいな、エ、しぶてい女郎め、泣も

儕では咄かしをるまい、ア、聞けば時次郎めと、儕の中、眞實の子さいふ事は知つてある、サア縁め、其時次郎は何處に居る夫から吐かせ。イヤ知りませぬ、アコレ申し、縁か何の知りませう。アイヤ／＼お前が傍に居乍ら、縁も知らぬさはいはさぬぞへ。チ、それ／＼、サア白狀しをれ。詞ア、術ないわいのう。サア若しくば吐かせ。イヤ知らぬわいのふ。エ、しぶさい小びちよめ思ひ知らさん、ヤ是喰へと、鐵灸振上げ續け打ち。打据らるゝ悲しさは、此世からなる八寒地獄、大焦熱の苦しみに、息も絶へ／＼絶え入る縁、逃げんこそれと締搦む、纖弱き春中厭ひなく、強氣の勤兵衛引摺み、はつし／＼と打据られれば、惜や色増す若縁、アット一撃倒れ伏す。さしもの勤兵衛呆れ果て、苦りきつて座に直れば、浦里重き顔を上げ、誰を恨みん、身の罪科

作大又・作大・作大

然斷を價眞の畫映本日
の畫映ネキ帝大たげ昂
。いさ下待期御に開公

場切封の畫映ネキ帝大

座 天 辨

戀故今の憂き苦勞、我身一つは厭はれど、何にも知らぬ此縁、斯る憂目を見せるのも皆私から起つた事、堪忍してたも怵へてたも、子供心に聞分けて、親は目先にありながら、陽氣浮氣の酒事に、所體崩して殿御の事、逢たい見たいさしどもなさ、母を持つたが其方の因果、因果同士が報ひ来て、悪縁深き契じやと、前後も更に辨へず、庭に咬付き伏轉び、流す涙は春雨に、雪解け亂す許りなり。欠伸まじりにおかやは立寄り。詞テもしぶこい子やのう、逆も白状せぬからは、儂も次手に冥途の供と、又も箒を振上げる。折柄來懸る手代彦六。此体見るより。コリヤどうじやと、走寄つて引退くれば、おかやはむつこし。コレ彦様、詞お前はマア何で浦里が肩を持に出やしやんした。なんぼ片もちにへ、無躰ながら此手代、貴様達には用はない。すつそ其方へ寄つ

てゐや、くさいふに。へい、憚りながら此手代が、旦那様へ一寸お願ひが御座ります、エ、何で御座りますすわい、ム、ア、可愛らしいアノ浦里、ではないアノ縁又浦里は常々から私が、アイヤ常々から氣質は好い者で御座ります、へいそこを見込んで此彦六が、アイヤ折檻は手代の役、白狀は私が致させます、何卒お任せ下さらば、へい、難有い仕合せ、いふに主は打領き。マ、外の者なら赦されども暫しの内は彦六おかや、其方等二人に預け置く、屹度白狀致させよ、其間に我は休息せんよ、己が所爲の罪科も、後日の難は兩人に、譲る心の奥の間の、襖押明け入にけり。跡見送つて彦六が、浦里が傍にちよつつくばひ。詞コレ、今日那樣が何といふたへ、外の者なら赦されども、暫の内は彦六其方に預けおく、何ぞ何うじや、えらひ者

新	美
興	團
成	演公

・回二夜晝日毎・半時五と午正

三月の角座

じやあらうがの、じやに依つて常々から、
 俺がいふやうにさへすりや、此様な痛い目
 に逢はずまいに、イヤ又俺が素振を見て、
 吾儕と俺との疑もあるじある。コレ腹立
 ちやんなや、爰が辛抱じやわいの、廓に有
 内じやがな、大事ないぢな、爰は又俺次第
 じやがな、ヤコレお浦、里様さへウンこ
 や、コレ此の手代がノソレ深き心の 新内コ
 是程までに思ふのをチン／＼ツトンシヤン
 捨て行さはヨオチン／＼さりさは鬼よりこ
 わいおひらんへドピンテツピンカンテキセ
 リンリン／＼。コレ／＼彦六様、旦那
 に請合ひ乍ら、白状さうさばしもせいで
 浦里さへ見りやべたくさ見苦しい、私
 しもせいで、お前に任しておいたらば、此
 白状は得さすまい、ドレ私が代るさ、立寄
 るをさつて突退け。はさせんごうの不動さ
 んさけつかるばい、又貴様のいふ事じや

が、其御面相さした事が、しつかい宜徳の
 向ふ獅子みる様な面をして、此彦六様に惚
 れたさば、旦那の手前も面白ないわい、夫
 よりマア浦里が、縛繩から解いて遣るさ、
 後へ廻るをおかやがさつて突退くれば、箒
 押執り會釋なく、おかやが腰骨滅多打ち、
 叩き倒され雪まぶれ、忽ち凍え取結めて、
 呷さばかりに挫さ伏す。其間にちやつこ立
 寄つて。二人の締繩解ほごき。彦六は出来
 し顔。恚う二人助けたからは、恚うしては
 居られまい、若しも知れたら、俺を縛つて
 恚の通り、ヤアこいつは壺じやわい、逆も
 遅れぬ俺も身の上、ム、いつそ二人を連れ
 て退き、メリヤス詞君を我等が擔げて出て
 二人しつほり暮すなら、雪に凍えて死す逆
 も、だんない／＼、コレ大事な、ほんに
 忘れた臍繰の、路銀を取つてくる間、爰を
 離れず待つて居や。見付られなご足早やに

第一劇三場公演

三一年を代表す
 る尖銳劇團の
 オン・パレード

春三月の

浪花座

毎日四時開幕

己一人が呑込んで、勝手へ走入る跡は、見遣る彼方の二階より、忍びよく屋根傳ひ今宵一夜のかけ橋さ、足も漫に定め無き、難なく降りくる時次郎。詞ヤアお前は時次郎様、何時の間に、アコレ聲が高い最前

から何事も残らず聞いた、可愛い二人が、憂目に逢ふも皆我故さ、悲しい中の悦びは最前主かいしを、二階で聞くや否や、忍び入つてよく見れば、是こそ眞に、日頃尋ぬる金岡の自筆の一軸、エ、忝けない人なきを幸ひに、我が手にいれしは和女の蔭コレ恠うくと囁き合ひ、庭へ折しも足音に、機轉の浦里行燈の火、吹消す相圖に彦六が、探り足して、コレくお浦、詞是さへあれば一飛に、そ様と一緒に抜そうちや、幸ひ裏の切戸から、二人は先へ出給へ、我等は最前見て置いた、アノ床の間の掛物を、せしめて来る内此銀子を、必

す屹度預けるも、財布を渡し彦六が、奥へ行く跡何處を指してゆく空や、はや東空の明烏、飛ぶ如くに遠近や、後の囁や残らん。

物名竹松

りごおの春

部キゲクガ竹松
・演出總生女・

りほんさうご

座 竹 松 の 畫 映 さ ウ ヌ ヲ レ

四ツ橋

りよ

二月の文楽座
消息日誌

△二月一日

二月興行の初日開場。

府下教護聯盟の中學生マチネー第三回を
開演前月と同じく。

「赤垣源藏出立の段」

一勸進帳

△二月七日

大阪學生ドラマ・リーグの鑑賞會開催。

△二月八日

中學生マチネー第四回開催。

今回にて男子部を一時打切り引續き女學生マチネーの準備にかゝる。

△同日

新興木村組の新組織披露會が開かれ非常の盛會を極めました。

△二月十一日

女學生マチネー第二年第一回を教護聯盟主催の下に開演しました。満場の若い女性ば「寺子屋」の女房千代の母性愛に涙を絞り「勸進帳」の豪壯にそのかみの義經の苦行にいたく同情する等意義ある課外教材となりました。

△二月十二日

前塊地利國藏相塊地利國立銀行頭取でオーストリー學派の最後の學者現獨逸ボン大學のシユンペエター教授が宮島綱男氏の案内で御來觀になりました。

△二月十三日

米國カーネギー財團から交換教授として派遣され來朝したクライド・エー・ダナ

會我廼家

五郎劇

創立三十周年纪念行

午後四時開幕
ごうさんぼり
中座

・行興月三・

ウエー博士一行が日米協会の案内で來觀
されました。

△二月十五日

女學生マチネー 第二年第二回を開演夕陽
丘高女、岸和田高女、大手前高女の諸嬢
を迎へ非常の盛會を呈しました。

△二月十五日

BKの中繼放送で土佐太夫吉兵衛の「鷗
山古跡松」中將姫雪責の段を午後八時三
十分より約一時間に涉り内地全國北海道
臺灣、鮮滿まで現場放送をしましたか非
常に効果をあげ得られました。

△同日

前陸相代理時代初めて文樂を見物された
現第四師團長阿部信行閣下が參謀副官等
を引具して令夫人等同道にて來觀されま
した。

△二月十六日

世界的舞踊家サカロフ氏夫妻が公演の時
間を割いて來觀されました。特別室で熊
谷、中將姫の人形を並んで記念撮影をさ
れましたがその感想として次の如く語つ
てゐました。

「音樂のリズムさ、人形の動作さ、衣裳
其他の色」の三つが實に調和よく藝術に
携はる者の愉快に感じられました。

△二月廿二日

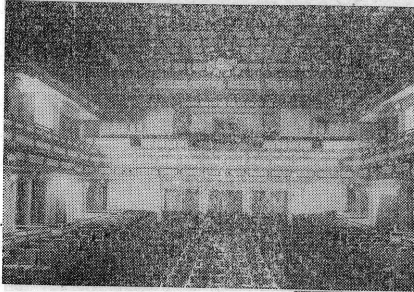
第三回女學生マチネー開催。
二月興行も満員の裡に愈々終演しました

軍勝常の線戰畫映

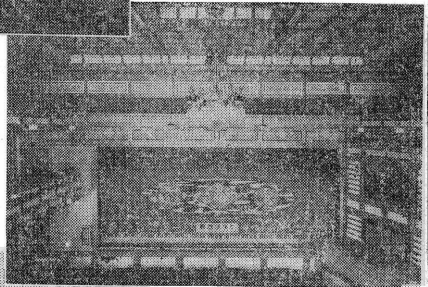
切封版新のマネキ竹松

座 日 朝

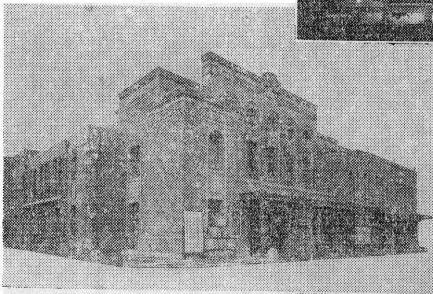
四ツ橋
文楽座
グランド
ラフ



場内観覧席全景



観覧席より舞臺を望む



文楽座外観全景



休憩所と貴賓席の入口

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前テモ御使用中テモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出デアレンシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座が必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用ア必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレンシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレンシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレンシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
- 既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセヌ
- 十一、臺本檢閱並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)		夜(自午後六時 至同十一時)		晝(自正午 至午後十時)	
		平日	土曜 日曜 祭				
文樂座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓		
		土曜	80圓	110圓	170圓		
		日曜 祭	90圓	110圓	180圓		

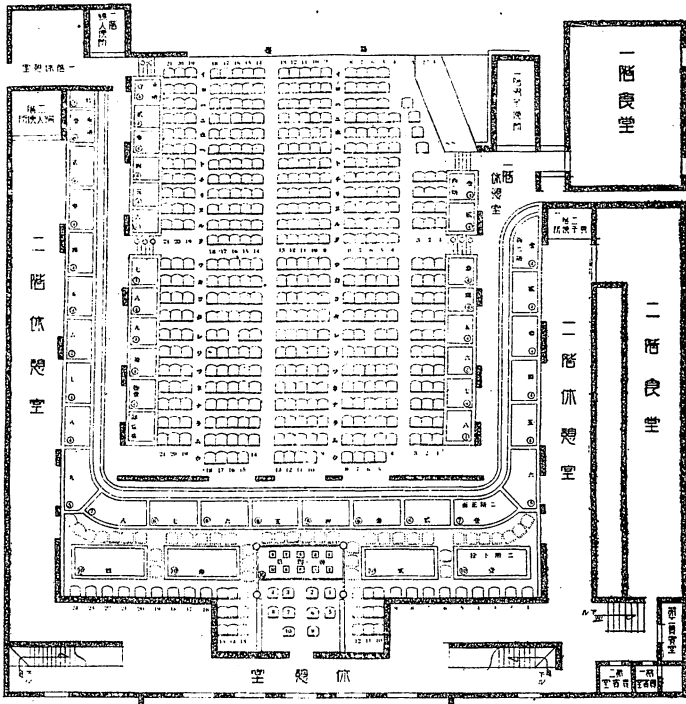
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アブライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンペーパー		1枚1回 1圓
大 衝 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラガエータ使用料		無料

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅
 子席のお切符は五日前から發
 賣致します、また五日以後の
 お切符も右席に限り御豫約申
 じ上げますから上圖の座席表
 に依つてお早く御望みの御場
 席をお申し込みになればお心
 のまゝにお好きな處が御自由
 にされます御用命の節お呼出
 しの電話は

南四七一一番で御座ぬます
 切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります。
 二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します。
 尙多人數様お団体様のお申込
 も御相談いたします。

内案御堂食座樂文

洋食堂 (西館階上)

ス ビー ド・ テイ ナー (御 定 食)	ス ライ (海 老、 魚)	オ ム レ ッ	コ ロ ッ ケ ー	ビ ー フ カ ッ レ ッ	チ キ ン カ ッ レ ッ	ビ ー フ ス テ ー キ (五 分 間)	カ レ ー ラ イ ス	コ ー ル ド チ キ ン	コ ー ル ド ハ ム	コ ー ル ド ビ ー フ	マ カ ロ ニ ー チ ー ス	ア ス パ ラ ガ ス	サ ン ド ウ イ ッ チ	ソ ー ダ 水 (特 製)	文 樂 ス ベ ッ シ ア ル	ビ ー フ ス テ ー キ
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、
五 〇 〇	四 〇 〇	四 〇 〇	四 〇 〇	四 〇 〇	四 〇 〇	三 五 〇	三 五 〇	四 〇 〇	五 五 〇	五 五 〇	四 四 〇	四 四 〇	二 四 〇	〇	〇	二 〇 〇

和食堂 (西館階下)

吸付辨當
御食事(五品御飯香物)
親子井

一、
二、
五〇〇
〇〇〇

酒場 (西館階上)

ソ ー ダ ビ ス ケ ッ ト	チ キ ン ユ ー ツ ス ル	コ ニ ヤ ッ ク	ウ イ ス キ ア	ミ リ オ ン ダ ラ ー	ア プ サ イ マ テ ニ ツ ペ	ド ラ イ マ テ ニ ツ ペ	マ ン ハ ッ タ ン カ ク テ ル	文 樂 カ ク テ ル	ア イ ス ク リ ー ム	ア ケ イ ス ク リ ー ム	紅 茶	ソ ー ダ 水 (普 通)	グ ア ン ヤ レ モ ン	特 ア サ ヒ ビ ー ル	菊 正 宗	お 吸 物	赤 火 し 卷	鐵 火 し 卷	雀 火 し 卷	雀 火 し 卷	ち ら ぎ し 司	に ら ぎ し 司	
一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、	一、
二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	二 〇 〇	七 〇 〇	九 〇 〇	六 〇 〇	六 〇 〇	七 〇 〇	二 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇	三 〇 〇	五 〇 〇	三 〇 〇	二 〇 〇	三 〇 〇	五 〇 〇	五 〇 〇	五 〇 〇	五 〇 〇	五 〇 〇	五 〇 〇

お電話の御用
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番



御宴會 づまは

のまさなみ
理料泉温一南

橋 四

明る・いる・感じのいい
南一温泉料理

◆ 文樂座御ひるき名簿募集 ◆

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法と講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部
わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」 特價 金貳圓

美しいグラフィック
ある好評月刊雑誌

道 頓 堀 一部 金三十錢

美しい原色版数刷
床しい文樂座の包裝

文樂の繪葉書 二組 金十五錢

文樂人形版畫もありませ

その色合。その雅趣。

郷土藝術の香ひ溢るゝ

文樂木版手摺繪葉書

新版發行されました。

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある

齋藤清二郎氏の作品です

毎月發行 三枚一組美麗なる包裝

一部 金五十錢

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

股方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙壺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありま

お出口は

すからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帯願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辞退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ

幕間中は

場内にて

出演者

當座御使用の

お電話は

自働車の御用は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所にて御自由にお飲み下さい。蒸したタオルの準備が御座りますから御自由にお使用下さい。寫眞撮影は絶對にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。場合は事務室へお申込下さい、『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。正面西側本家茶屋階段下に御座います。文樂座指定の均タクが新車を揃えて玄關にお待してゐます。眺望よき休憩所が御座ります。

四ツ橋

文

樂

座

前賣切符専用電話南四七二番

電話南 三七四〇八番

は會集御の月三春

ゝいのじ感いる明なかや和

で場劇會宴の阪大 書宴御の座樂文

昭和六年二月廿八日印刷
昭和六年三月一日發行

大坂・四ツ橋・文樂座
編輯兼
發行人 大塚 真三

大坂市西區土佐堀通一丁目
印刷者 永井太三郎

大坂市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

(B) 金四

圓 (御一人様)

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は快美な『ランチ』
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

(A) 金五

圓 (御一人様)

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は皆様本位の御定食
(和食洋食兩様の設備が御座ります)
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

□お申込は二十人様以上をお請け致します。

□記念撮影のお寫眞は終演と同時に所持歸り出来るやういたしております。

□お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願いたします

□お申込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。

□お電話の御用は前賣専用南四七一・三七八八・七四〇八番へ

るへ添をさし美な新清

ソビブラク

肌 白
色 色



クラブビシンを御愛用になればあなたは毎も明るく美しく朗らかです。

粉洗ブラク

の地生
す増を美